

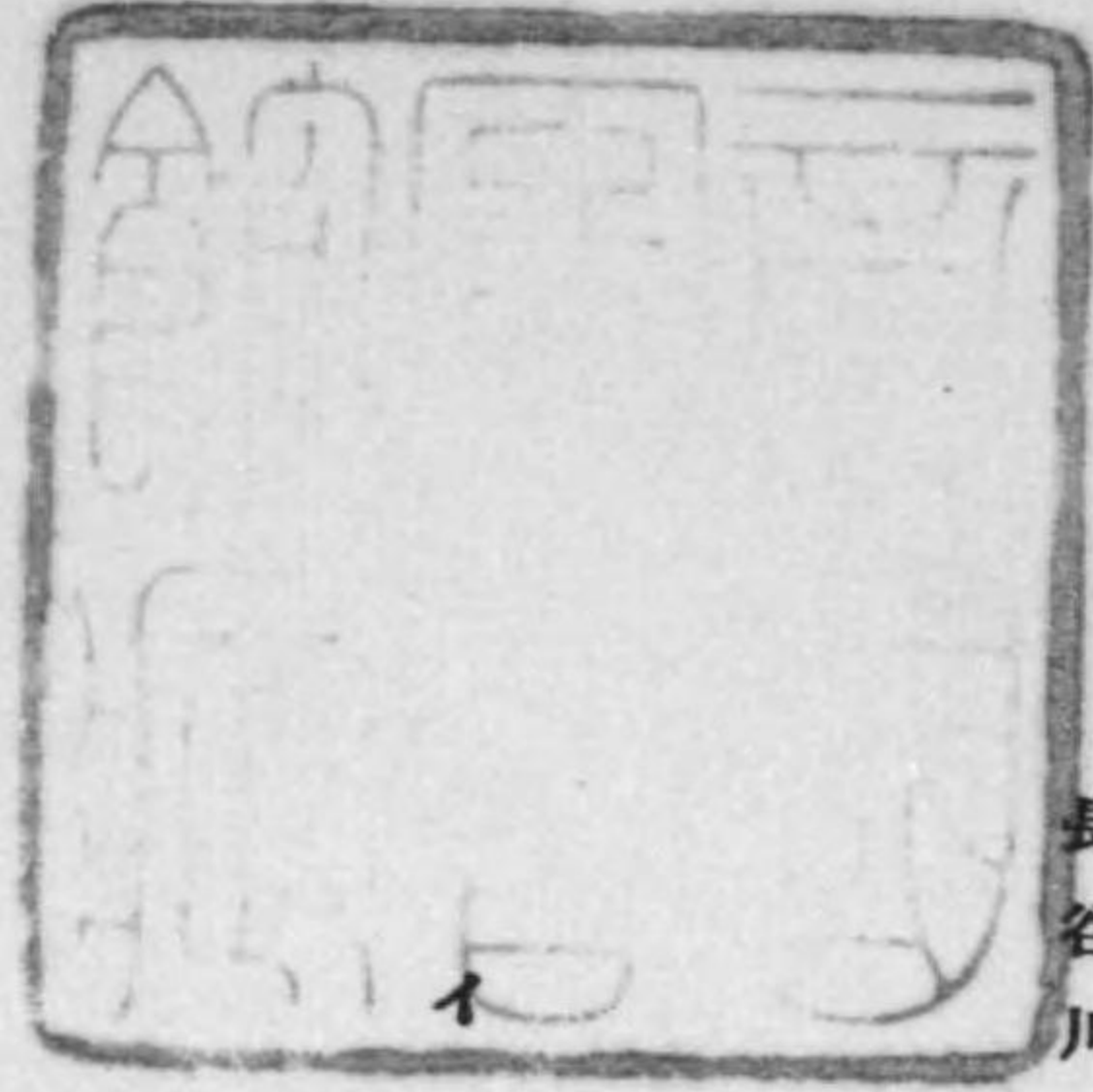
323
605

5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

始



2611



長谷川康輝

イ
ノ
ッ
ク
ア
ー
テ
ン

東京 征川書店藏版



復興版のはじめに

私が本篇の譯註を初めて發表したのは明治の末の頃で雑誌「英語の日本」誌上に於いてでありました。それを取りまどめて當時としては贅澤な裝禰を加へて讀書子に見ゆるに至らしめたのは書肆建文館の好意に依つたので、其の後數版を重ね英語界の諸先輩の推獎を辱うし、Prof. Swift の如きは東京帝大、東京商大に於いて原作を講せられた折の參考書として私の譯を生徒に薦められたこともありました。

今回版を新たにするに方り譯文にも註解にも尠なからず筆を加へまして「復興」の名に意義あらしめようと努力致しました。

元々私の立場が語學にありますので、原文を忠實に反譯したいと思ふあまり、詩の逐行譯といふ損な試をいたしましたので譯文の艶は大分には抜けました。が、その代り語學研究者の手引としては相當便利なものであらうと自惚れて居ります。

大正乙丑春日

長谷川 康

次に掲げるのは舊版に對する *The Japan Advertiser* の批評であります：—

Enoch Arden, translated by Yasushi Hasegawa.

We have received a small book for review with the above title. It is a nicely bound booklet of about 200 pages, embodying the immortal poem of Tennyson and its Japanese translation in rythm with notes, intended for Japanese students of English.

The remarkable part of the translation is that the Japanese version is in smooth, rythmical verse, translated line for line from the original, revealing a remarkable wealth of the translator's Japanese classical terms. A persual of the translation imports to the reader a great deal of the pathos and beauty of the original tale, if not the magnificent beauty of the original words and their time. To write Japanese verses is not the simplest task in the world, and Mr. Hasegawa has done his task admirably in rendering one of the most beautiful ballads in English into the Japanese verses.

尙、舊版に對して或は批正又は聲援を與へられた諸氏の芳名を列記して感銘を新たにしたいと思ひます。

村田祐治氏 佐川春水氏 熊本謙二郎氏 石川林四郎氏 堀江秀雄氏 近藤潤治郎氏

イーノック アーデン

テニスン 卿作

長谷川 康 譯

一	長き荒磯に	立ちつゞく	斷岸こゝに	落ちこみて
	一ト懐ろの	平沙あり、	浪打ち寄する	白濱の
	彼方に狭き	埠頭をば	圍みて赭き	家々や、
	わびしく立てる	古寺を	見上ぐる方に	いや高く
	つゞける街路は	風車	めぐる磨舎に	通ふなり。
	其後方の	空高く	聳ゆる丘は	年古りて
五	胡虜の名残の	塚もあり	秋としなれば	里人が

こゝを遊山の
緑の林も

目的にて
茂るなり

群れ来て遊ぶ
そこなる圓き

榛樹の
窪地には。

二

今は百年の
三人遊べる

その昔
幼児は

このわたりなる
生れし家も

なぎさ路に
とりくぐりに、

港に並ぶ

花もなき

いとし少女の

アニー、ライ、
呼ぶ童、

製粉所の主人の

獨兒の

荒くれ水夫の

子なりしが

並びにイノツク

アーデンは

今孤兒の

身なりけり、

冬の日、父の

船沈み

岸の藻屑や、

木の端や、

さても三人の

幼兒は
綱具、また、

色黒みたる

魚の網

錆びし錨や

曳き揚げし

小舟の隙に

戯れて

一五

二

二

こぼれ崩るゝ
水浸くさまに

眞砂もて
打興じ、

築ける城砦
あるは汀に

たちまちに
打ち寄せて

玉と散布く

白浪を

逐ひつ逐はれつ

日一ト日

沙に留めぬ

いたいけの

足痕、日に日に

消されつゝ。

此の岨岸の

裾の方に

あける洞穴の

廣からぬ

中にて三人の

幼兒の

なせる遊戯は

まゝ事の

一ト日イノクが

亭主役

次にフキッブも

亭主役、

順は變れど

アニ、ライは

常時變らぬ

女房役、

さは云へイノク

折節は

七日も己れ

主人たる

役をば占めて

「こは我家」

こは我妻」と

云ひ張れば、

「我にも妻よ

君と我れ

交み代り」と

フキッブが、

二五

詞に華の

争ひの

起れば強き

イノックに

負けて哀れや

フリップは

空色なせる

眼の中に

やる瀬なぎさの

うらめしの

涙の露を

満へつゝ

「あなうとましの

イノクや」と

わめき罵る

聲聞けば

いといちらしく

少女兒は

同情の涙

せきかねて

二人の腕に

縫りつゝ

「な、争ひそ

我れ故に、

妾は御身等

いづれにも

いとしの良人と

仕へなむ」。

娛しかりける

稚き日の

東雲もはや

過ぎて今

昇る朝日に

人生の

情慾新たに

さしそひて

二人の胸に

ふれ行けば、

唯一ト筋に

我が妻と

少女一人を

戀ひ渡る。

イノクはそれと

露骨に

思の丈を

明せしが

フリップは秘めぬ

胸のうちに。

やさし少女は

フリップに

情を寄する

さまなれど

心に戀ひぬ

イノックを、

されど己れも

覺らねば

否みもしつらむ

問はれなば。

さてもイノクは

前途の

希望いよく

堅めつゝ

思ひ定めぬ、

生計をば

及ばむ限り

切りつめて

剩れる黄金

貯へつ

小舟を購ひ

更にまた

家を造らへ

諸共に

いとシアニイと

暮さばや。

かゝる望の

成就して

かく幸多く、

勇ましく、

さればとてまた

いたづらに

血氣の勇に

はやらざる、

危きことを

慎める

漁夫は

このわたり

長き荒磯の

濱傳ひ

イノクに及ぶ

者ぞなき。

かくてイノクは

一ト年を

五

商船に

水夫と身を立て

八重の潮路の

世の諸人は

廿歳を超えて

船購ひて

家はきよらに

狭き街路の

乗り組みて

三度びまで

荒浪に

温き

一ト年の

イノツクが

心地よく

中央程

技能を磨きて

人の命を

捲き去られむと

厚意を以つて

卯月も末の

アニイのために

磨合の方に

上の方にぞ

天晴の

救ひけり、

なしつるを。

彼を見ぬ。

頃ほひに

構へたる

通ふなる

建ちにける。

六

やがて、野山も

里の若衆や

提ぐる囊袋や

金色の

少女等が

風呂敷や

穰の秋の

業務を休みて

籃持つ手に手

夕ちかく

己がじし

とりぐに

七

果實拾ひに

(病の牀に

一ト時ばかり

いま見えそめし

重なる如く

イノクとアニー

眼清しく

光を添ふる

神祭る火を

男女の眼

やがて男女の

木陰に身をば

榛樹の

臥す父の

後れしが、

榛樹の

なだれゆく

睡じく

雨風に

愛の火は

見るがごと。

面容に

顔と顔

潜めつゝ

森に集ひぬ。

側去り難き

攀ち登り行く

梢さながら

あたりに見ゆる

手に手を取りて

晒せしイノクの

静かに燃えて

フリップはこれを

己が戀路の

寄り添ふ見では

手負の鹿を

フリップは

用事ありて)

山腹に

鳥の羽

男女こそ

居并びつ、

顔容に

影清く

眺めやり

終局を見つ、

吐息して

宛然に

五

商船に

水夫と身を立て

八重の潮路の

世の諸人は

廿歳を超えて

船購ひて

家はきよらに

狭き街路の

乗り組みて

三度びまで

荒浪に

温き

一ト年の

イノツクが

心地よく

中央程

技能を磨きて

人の命を

捲き去られむと

厚意を以つて

卯月も末の

アニイのために

磨合の方に

上の方にぞ

天晴の

救ひけり、

なしつるを。

彼を見ぬ。

頃ほひに

構へたる

通ふなる

建ちにける。

六

やがて、野山も

里の若衆や

提ぐる囊袋や

金色の

少女等が

風呂敷や

穰の秋の

業務を休みて

籃持つ手に手

夕ちかく

己がじし

とりぐに

七

果實拾ひに

(病の牀に

一ト時ばかり

いま見えそめし

重なる如く

イノクとアニー

眼清しく

光を添ふる

神祭る火を

男女の眼

やがて男女の

木陰に身をば

榛樹の

臥す父の

後れしが、

榛樹の

なだれゆく

睡じく

雨風に

愛の火は

見るがごと。

面容に

顔と顔

潜めつゝ

森に集ひぬ。

側去り難き

攀ち登り行く

梢さながら

あたりに見ゆる

手に手を取りて

晒せしイノクの

静かに燃えて

フリップはこれを

己が戀路の

寄り添ふ見では

手負の鹿を

フリップは

用事ありて)

山腹に

鳥の羽

男女こそ

居并びつ、

顔容に

影清く

眺めやり

終局を見つ、

吐息して

宛然に

忍び脚にぞ
下手なる
森の窪地に
辿り着き
こゝにてしばし
人々が
笑ひ興ずる
その間を
人目忍びて
嘆きつゝ
やがて彼方へ
去りにけり
胸には残る
永久に
わびしき思ひ
包みつゝ。

かくて男女の
婚禮を
告ぐるや樂し
鐘の音
娛しく過ぐる
歲月の
幸多かりし
七_ナ年や、
幸多かりし
七_ナ年は
身は健かに
財物も足り
互に眷ひつ
眷はれつ
正しき業務に
いそしみて
子さへ設けぬ
一の姫
揚ぐる産聲
聞くや否
イノクの胸に
浮びたる
男々しき希望
今よりぞ
己が力の
及ぶ程
獲たる財貨を
貯へて

凸

全

この兒はいかで
父よりも
はた母よりも
優りたる
知識ある身と
なさばやな。
かゝる希望の
更に又
新たになりぬ
二_タ年を
經て生れたる
男の童
可愛の姿
母人が
淋しきをりを
慰むる、
イノクが家を
外にして
荒き海路を
渡る間や
海を離れし
村里へ
旅せし後を
守るとき。
そもやイノクが
白馬と
海の獲物の
鱗介也
潮の香ぞする
魚籃、
百度千度
冬の日の
嵐に色も
荒くれし
赭き面貌は
そのわたり
市場の人に
知られたる
のみにはあらで
はる／＼と
砂山超えて
あなたなる
青葉陰そふ
徑遠く
門には獅子の
紋所
孔雀形せる
水松の樹

凸

全

懸け離れたる
此家の忌日の

一ト構
響應は

庄屋の邸に
イノクの手より

聞こえつゝ
納めける。

されど異變は
こゝなる狭き

起り來ぬ
港より

定めなき世の
十哩ほど

ならびとて。
北の方

溜き港ぞ

開けたる
海路より

此地へイノク
往きつ戻りつ

時々
したりしが、

或時そこの
物の機に

過ちて
介抱りて

手を滑らして
見れば隻脚

攀ぢたるに
墮ちにける、

人々これを
かくてその地に

子を舉げぬ、
イノツクが

傷療しつゝ、
此兒のいとも

ある間に
挫けたり、

妻はまたもや

傷癒しつゝ、
此兒のいとも

病弱きに、

加へて心

なき人に
生計だに

生業の途
立ち兼ねたりと

奪はれて
聞きし時

今は妻子の
さすが男々しく

信仰の篤き
さま／＼に

イノクの
疑の雲

心にも
かゝりける。

力なき身の

さま／＼に

疑の雲

かゝりける。

眼にうかぶ

可愛兒の
悲慘なる

すがたはあはれ
その日暮しの

心地して
日一ト日

可愛の妻は

袖乞と
妻や兒を

なりしとぞ見て
我身は如何に

祈りける
ならむとも」

「救はせ賜へ
かく祈りつゝ、

ありしとき
イノツクの

前にイノクが
人格をば

乗り組みし
頼もしく

船の所有主は

イノツクの

人格をば

頼もしく

覺えたりしが
さて語りける、
いまその船の
まだ幾週日
ところもこのの
聞くよりイノク
嬉しや今し

この度の
我が船の
水夫頭
日數經て
港より、
躊躇はで
捧げたる

不幸を聞きて
支那さして
求めつゝあり
後にぞ船は
御身に志望は
勸告のまゝに
祈禱の應驗

訪ね來つ
出づるあり
往まさすや、
出づるなる
あらずやと。
諾ひぬ、
ありしよと。

されば今はた
宛然雲の
こなたは暗く
日影輝く

災厄の
一ト叢に
見ゆれども
如くなり。

小暗き蔭は
照る日曇りて
あなたの沖は
ア、さりながら

なんのその
海原の
あか／＼と
我妻は—

我れ往にし時—
こゝにイノクは
船を賣らむか
そも幾そ度
武士が馬を
されど賣らばや
物貨を仕入れて
水夫船人や
われあらぬ間も
我れ彼邦土に
イザ行かむかな
行くべき要の

我兒等は
やゝ暫し
ア、されど
荒浪を
知るが如
我船を
我が妻に
その妻が
妻の手に
渡りなば
此の航海
あるかぎり—

如何に其日を
胸に思案の
實に懐しの
凌ぎしことぞ
我はそなたを
その賣上の
あきなひ店を
求めむ品を
家構ふるに
など一ト儲け
一度のみかは
やがて萬金を

送るらむ。
とつおいつ
我が船よ
汝に乗りて
知るものを—
代金をもて
開かせて
備へなば
事足らむ、
せざらむや—
二度三度
齋らして

あはれ今より
利潤りいやまし

大いなる
豊裕ゆたかなる

船ふねの所有しゆ主と
樂たのしき月日

身を起し
送らばや

可愛めづの兒等は

それ／＼に

完まき教育

受けさせつ

世を安やすらけく

渡らなむ

兒等こどもを左右さゆうに

侍まじらせて。

かくぞイノクは

胸むねの中

萬般ばんぱんを思おもひ

定めつゝ

迪たり着きたる

我宿われしゆくに

出でで會あふ妻つまは

色いろ牙はえず、

病勝やまなる

末すえの兒こを

歸かへりませしか

居ゐたりしが

それと見るより

躍はり立ち

いといともか弱よわき

嬉うれしやと

良人りやうじんの腕うでに

抱かかする

小こちき手足てあしを

さぐり見みつ

イノク優やさしく

抱かかき取り

實じつに父ちち親おやの

情なさけなれや、

重量じゆうりやうはかりつ

愛あで撫なづる

打うち明あけ兼かねて

漸しだうに

されど頓とんには

我胸われむねを

打うち明あけ兼かねて

漸しだうに

病勝やまなる

末すえの兒こを

歸かへりませしか

居ゐたりしが

それと見るより

躍はり立ち

いといともか弱よわき

嬉うれしやと

良人りやうじんの腕うでに

抱かかする

小こちき手足てあしを

さぐり見みつ

イノク優やさしく

抱かかき取り

實じつに父ちち親おやの

情なさけなれや、

重量じゆうりやうはかりつ

愛あで撫なづる

打うち明あけ兼かねて

漸しだうに

朝あな夕ゆふなに

あまた／＼び

抱かかきつ絶たりつ

かき口説くちせく

(君往きみむかひきまらば

もろ／＼の

禍わざはひ害がいこゝに

起たり來きむ)

ア、願ねがはくは

我良人われりやうじんよ

我われを可愛めづと

思おもひなば

子こ供ども可愛めづと

思おもひなば

思おもひ止とまり

賜たまはれと。

イノクは己おのれが

爲ならな

妻つまの身みをのみ

思おもふ身みの

これ妻つまと子この

爲ななりと

アニの言葉ことばを

聞きき流ながし、

翌あしたけての口くちにぞ

我妻われつまに

思おもふ由よしをば

語かたりける。

そもやイノクが

結納けつなに

贈たまりし指環さし

箝くわめてより

アニは始めて

イノククの

旨あじに背そむきて

争まひぬ、

されどアニは

はしたなく

言ことの葉は多く

争まはで

たゝ繰くりり返かへす

願ねが事ことも

涙なみだながらに

しみ／＼と

朝あな夕ゆふなに

あまた／＼び

抱かかきつ絶たりつ

かき口説くちせく

(君往きみむかひきまらば

もろ／＼の

禍わざはひ害がいこゝに

起たり來きむ)

ア、願ねがはくは

我良人われりやうじんよ

我われを可愛めづと

思おもひなば

子こ供ども可愛めづと

思おもひなば

思おもひ止とまり

賜たまはれと。

イノクは己おのれが

爲ならな

妻つまの身みをのみ

思おもふ身みの

これ妻つまと子この

爲ななりと

アニの言葉ことばを

聞きき流ながし、

心痛めど

飽迄も

己が決意を

枉げざりき。

一七〇

かくてイノクは
アニイの爲めに
棚をしつらへ
店舗の體裁に
かくて終日
小さき住宅の
錐、鋸の
我身を曝す
やがて工作の
狭き所へ

乗り馴れし
仕入れたる
隈をあけ
造らむと
怠らず
動くほど
軋る音は
獄門臺
こと畢へて
めでたくも

懐しの船
商品をそれく
街路に沿ひたる
木匠のわざ
今日を名残の
槌や手斧を
アニの耳には
樹つる響と
イノクの手技の
總てのものを

手離して
收むべき
茶の室をば
始めける。
その日まで
揮る音や
さながらに
鳴り渡る。
手落なく
整へて

一八〇

つゞまやかなる
成れる花にも
及ばん限り
勞れしまゝに

状態は
比ふべし、
盡さでは
寢室に入り

美妙じき造化の
かくてアニイの
止まぬ氣性の
熟睡したりき

大御手に
爲ならば
イノツクも
翌朝まで。

一八五

イノクは今ぞ
いと勇ましく
妻の憂慮と
されどイノクは
俯し畏みて
神に宿れる
奇瑞の中に

門出の
振舞ひぬ。
思はずば
勇ましく
畏くも
人の性
祈りける、

朝となりても
アニの憂慮の
露も心に
神を崇むる
人に宿れる
こゝに交はり
妻兒に天恵

快く
數々も
せざりけむ。
入なれば
神の靈
通ふてふ
垂れ賜へ

我身は如何に

なればとて。

かくてアニイに

打向ひ

「アニイよ神の

冥護みたままもに

依りて今度の

航海は

日和麗穩ひよりうららに

そなた等が

世渡る船路も

安からむ。

家の内外うちとを

潔めつゝ

我を迎ふる

準備よなへせよ

やがて戻らん

我妻よ、

そなたの心

「ア、この兒

かくて赤兒の

搖籃ゆりかごを

軽く揺りつゝ

嬰兒あやうしよ

この愛あならしく

いたいの

萎しぼひて小さき

可愛かわゆらし

さは云へ此兒

弱ければ

一と入我れには

その時に

あはれ異變ことなう

生ひ立ちて、

我れ歸り來こむ

物語

此膝ひざの上に

かきのせて

外國こくご々の

たのしまむ。

語り聞かせて

興きんに入る

顔見む日をば

送おくらすや」。

いざ、アニイ、いざ

快こく

我門出かどだをば

送おくらすや」。

かく勇ましく

希望のぞみある

良人の詞

聞くほどに

アニの心も

勇みしが、

やがてイノクは

改めて

語り出しぬ

おごそかに

いみじき神の

御教ごきょうを

船人の常

飾かざなき

言の葉ながら

諄々しんじゆと

神の攝理しやくりや

信仰しんぎやうの

道を説けども

アニ、リーは

耳傾みみかたくる

状態さまなれど

心に聴かず

さながらに

水汲む里の

少女をさめ兒が

胸奥むねの思ひは

巖清水いはしみづ

汲み賜たまひてし

懐なごかしの

人の方にぞ

通とほひつゝ

聞けど聞えず

水桶みづかの

充ち溢あふるゝも

しらぬごと。

やがてアニイは

いひけらく

「御身は賢く

おはせども

賢くませど

されどあゝ

我れは知れりな

あきらけく

我れは再び

我良人の

顔見むことは

叶はじと。」

「よしさもあらば

我れよりぞ

そなたの顔を

眺むべし

アニイよ、我身

乗り組める

船は此地を

過るべし

雙眼鏡を

携へて

我がこの面

打ながめ

根もなき杞憂

攘へよ」と

(その口取をば

示しける。)

三五

いよ／＼今ぞ

門出せん

時刻迫れば

イノツクは

「ヤヨ、我妻よ、

いさましく

心引き立て

雄々しかれ

兒等を哺育み

守り立て、

我れ歸り來む

その日まで

家の内外を

整へよ

イザ今こそは

我れ往かめ、

我が身の上を

な憂ひそ

よし憂ふるも

汝が憂ひ

三〇

委ねまつれよ

大神に、

頼み甲斐ある

大神に。

雲山萬里

隔たれる

絶東の空の

邦々も

神いまさざる

ことやある

よし我れ遠く

行けばとて

いかで離れむ

神の御手、

大海原も

神の屬領

大海原も

神の屬領

神こそ造り

給ひたれ。」

三五

「イノクはやをら

起ち上り

腕に抱き

ながさめつ

萎るゝ妻を

屈強の

恠む兒等を

愛で撫づる、

見馴れぬ光景は

何事と

稚兒は今しも

スヤ／＼と

されど脆弱き

三人目の

熱になやみし

勞れにて、

睡るもあはれ

前の夜の

抱き上ぐるを

押し止め

アニイがあはや

睡る兒を

抱き上ぐるを

押し止め

三〇

眼な覺させそ

今日の別離を

アニイは後の

一房の髪

膚離さじと

さらばとばかり

イノクが豫て

望遠鏡を

眼に適ふやう

さては涙に

妻の方には

眠らせよ

覺えむしと

記念にと

剪り取りて

秘めにける。

惜まるゝ

示したる

借りて來つ

度を合はす

眼は曇り

見えじとは

この嬰兒が

寝顔に名残を

その嬰兒の

渡せばイノク

今は用意も

袂別ちて

目となりぬれば

見れど良人の

術知らざりし

手はわなゝきし

知らでイノクが

いかでよく

惜みける。

前額より

末かけて

そこゝに

立ち出でぬ。

アニイリー

見えざるは

爲なるか

爲ならぬ、

手を舉げて

合圖する間に

船は過ぎ

相見る機會も

過ぎにける。

あれを名残の

後見送りて

良人が今度の

心痛めど

店商業に

商機を見るの

才氣もあらず、

高値をかけて

心懸りや

そは幾度か

白帆影

アニイリー

旅立は

さればとて

いそしめど

明もなく

さればとて

廉く賣る

「我良人の

差迫る

かすむ沖邊に

迎る家路も

死出の旅とも

良人の意嚮に

習はぬ業の

巧に世をば

容を嘯むる

その駈引も

感情の程も

一時の急を

消えて行く

涙なり。

思はれて

背かじと

哀しさに

渡るべき

辯舌もなし、

辨へず、

如何ならむ」

凌がむと

店の在荷を

人の手に

仕入れし時の

原値より

若干廉き

價もて

渡せしことも

まゝあれば

嗚呼商買は

立たぬかと

憂に心

打ち沈み

空頼みとは

露知らず

良人の音信

待ちわびて

立つる煙の

絲ほそく

からくも口を

糊しつゝ

しめやかに、また

痛ましき

その口くを

送りける。

さて三人目の

嬰兒は

病氣多く

生れしが

いよ、庭弱に

なりまさり

愛情をこめし

母親の

篤き看護の

甲斐もなく、

その甲斐もなく

母親が

爲す用務ありて

をりくは

稚兒の傍を

離れしか、

なくて叶はぬ

薬用の

食品の缺けたる

爲めなるか

なくて叶はぬ

薬餌の

品目指しふべき

その人を

迎ふる料の

あらざるか、

いづれにもあれ

あなあはれ

長き病臥の

牀の上

(母だに心

つかぬ間に)

籠抜け出て、

羽をのす

小鳥の如く

いつしかに

小さく

罪なき靈魂は

稚兒の軀體を

離れける。

野邊の葬送の

事畢へて

まだ日數経ぬ

頃なりき

アニイを思ふ

眞情の

いと切なる

フリップは

(イノクが門出の

以來は

絶えてアニイを

見ざりしが)

かく疎ましく

過せしを

いたく心に

悔みつゝ

「さなり、今こそ

我れ往きて

アニイの許を

訪れむ、

及ばずながら

慰藉と

なりもやせむ」と

尋ね來ぬ。

人の住みたる 奥の一ト室に 戸をホト／＼と 押し披け見れば 其追懐も アニイは今や 壁に面を やがてフキップは 「やよアニイどの	氣配だに 通ふべき 音なへど 可愛兒に 一と入に 誰人の むけながら 立ち寄りて 御身に今	あらぬ店をば 戸口に少時 應ふる者も 別れて日數 深き悲哀に 顔見ること たゞ潜然と おもはゆげにも 願のありて	過ぎ行きて 佇みつ あらぬまゝ 淺ければ 沈む身の 心憂く 泣くばかり。 口籠り 參りたれ」。
--	---	--	---

フキップの詞

聞きあへず

アニイは怨の

涙聲

「かく哀める

寄邊なき

我身に何の

願ぞ」と

いはれて心 此方は篤き アニイの側に 「御身を訪ね ことを語らむ 御身の眼識 雄々しき人よ 事は必ず など、彼人は 御身を淋しく 遊ばむ爲めか、 御身等夫婦が	挫けしが、 愛情に 座を占めつ まゐりしは ためにこそ、 曇りなく イノク殿、 成し遂げで かくばかり 取残し、 さにあらず 受けしより	さしも彼方は 恥らふ我を フキップはやをら イノク殿の 我れ口頃より 我れには遙か かくなさばやと 止みたることは 長き旅程に 外邦々を あはれ可愛の 優れる教育	素氣なくも 勵まして 語るらく、 望まれし いへること 立ち優る 思ひたる あらざりき。 上れるか、 回歴りて 兒童等に 受けさせん
--	---	--	---

三〇〇

資金を作らむ

爲めにとて

イノツク殿は

行きましぬ。

異變なう歸り

まさん時

兒等が、貴き

生涯の

晨朝の頃を

徒爾に

過せしを見ば

慨かれむ、

よしや此世に

在さずとも

草葉の蔭にも

嘆かれむ、

兒等が學べる

こともなく

野に狂ふ駒を

さながらに

三〇五

心のまゝに

生ひ立たば。

さればアニ殿

御身とは

振分髪の

昔より

睦み合ひたる

仲なれば

御身の良人の

心根や

兒等の行末

思ひやり

眞情こめし

我願ひ

ゆめ／＼空に

し給ふな、

心苦しく

思しなば

イノツク歸り

來まさむ日

我れに出費を

拂はれよ

御身の心に

濟まざるか、

やよ、アニ殿

我れは富み

物も足りぬる

身にしあれば

三〇〇

資金を作らむ

爲めにとて

イノツク殿は

行きましぬ。

異變なう歸り

まさん時

兒等が、貴き

生涯の

晨朝の頃を

徒爾に

過せしを見ば

慨かれむ、

よしや此世に

在さずとも

草葉の蔭にも

嘆かれむ、

兒等が學べる

こともなく

野に狂ふ駒を

さながらに

三〇五

心のまゝに

生ひ立たば。

さればアニ殿

御身とは

振分髪の

昔より

睦み合ひたる

仲なれば

御身の良人の

心根や

兒等の行末

思ひやり

眞情こめし

我願ひ

ゆめ／＼空に

し給ふな、

心苦しく

思しなば

イノツク歸り

來まさむ日

我れに出費を

拂はれよ

御身の心に

濟まざるか、

やよ、アニ殿

我れは富み

物も足りぬる

身にしあれば

三〇五

容し給はれ、

御身の兒等

我れ學校に

送らなむ、

今かく訪ね

まつりしは

此願事の

ありてなり。」

三〇〇

聞きてアニイは

うつ向ける

額を壁に

つけながら

答へていひぬ、

「フキリブどの

御身に向くべき

顔もなし、

げに我ながら

哀愁に

心亂れし

愚よ。

御身の來り

ましし時

悲哀に心

亂れにき、

今は御身の

身に餘る

情に胸の

せまるなり、

されどイノクの

世にあるは

我身の胸に

確と知る、

費用は償ひ

まゐらせむ、

金は償ひ

能ふとも

酬いられじな

かくばかり

篤き御身の

御情はし。」

「さらば御身は

我請を

さらばと フキリップ 問ひけるは

許したまふか

アニイ殿」

云はれてアニイ

向き直り、

涙にうるむ

眼を向けて

優しき面上

凝視り

溢るゝ感謝

述べながら

手を手に堅く

握りしめ

庭へと歩を

運びける。

フキリップは家路に

就きにけり。

學の窓に

送りつゝ、

其他残る

方もなく

三五

立ち上りつゝ、

湧き出づる

暫しが程は

フキリップの

やがてフキリップに

心から

情を籠めて

フキリップの

やがてあなたの

手狭なる

かくて心も

勇みつゝ、

三〇

かくてフキリップは
教科書を

姉弟を
求めやり

三五

心を添ふる

有様は

我兒に盡す

如くなり。

里の人等の

口の端に

フキリップは切なる

願望をも

アニを訪ふこと

稀れなりき、

送る品々

さまざまに

垣根の薔薇の

早咲よ

山の獲物の

小兎や

きめよきを賞で

賜はれと、

苦しき胸を

推し量り

めぐる風車の

粉磨場に

眞の生の

父親が

さてはアニイを

慮へども

かゝらむことを

氣遣へば

獨り自ら

抑へつゝ、

されども兒等に

託けて

自園のものや、

果實や、

後れ咲きよと

時々、

又をりゝは

此粉の

人の恩恵を

受くる身の

贈る麥粉は

空高く

フキリップの手にぞ

磨かれたる。

三四〇

されどもアニの心をば

訪ひ来るフキップの顔見れば

忝けなさに胸せまり

一言だにも得も云はぬ

されども兒等は

路の遠方に

かき抱かれつ

フキップの家も

辛き、嬉しき

うるさき迄に

フキップの父やと

斯くてフキップは

量りかねけり

厚き情に

何と感謝の

アニの心を

又無きものに

姿を見れば

狂れ親みぬ

兒等の出入の

由なき事の

はた取絶り

いよ、親しく

兒等の心を

フキップは、

女氣の

言の葉の

知らざりき。

思ひつゝ

走りより

心より

まゝにして

告げ口に

戯れつゝ

なり勝る。

得たりしが

イノクは全く

まだあけきらぬ

何處ともなく

兒等の心に

我が家を後に

十年は夢と

忘れぬ、

朝まだき

歩み去る

イノツクは

なししより

過ぎぬれど

幻のごと

葉影小ぐらき

影の如くに

今や残りぬ、

月日の歩み

風のたよりも

夢のごと、

樹下徑

おぼろげに

故郷や

いと疾く

つたはらで。

かゝりし程に

打連れ立ちて

望めばアニも

フキップの父やも

訪ねて見れば

或る夕べ

榛子を

行かましと

もろともに

フキップは

アニの兒等は

拾ひに森へ

云ふに稚兒等は

伴はばやと

花粉にまみれ

友どちと

行かばやと

お馴染の

望みけり。

いそしめる

蜂さながらに
 「フキリップの父や
 「否よ！」と彼れは
 いと快く
 行くにあらすや」
 白き粉に
 もろともに
 答へけり、
 従ひぬ、
 打ちつれて
 まみれて働き
 行きまさすや」
 されども兒等に
 (思へアニイも
 彼等は森に
 居たりけり。
 と、尋ぬれば
 うながされ
 もろともに
 行きにけり。

攀ぢ易からぬ
 樹々の梢の
 森の端にぞ
 呼吸はづませて
 いと快く
 兒等は打連れ
 二人の許を
 山路を
 段々に
 來りしが
 「しばし今
 フキリップは
 勇ましく
 離れつゝ、
 半ばばかりも
 窪地の方に
 アニイは力
 息ませ賜へ」と
 アニイと共に
 喜ばしげの聲
 笑ひさゝめき
 登りけむ、
 なだれ行く
 つきはてゝ
 云ふまゝに
 休らひぬ。
 揚げて
 賑はしく

榛樹の枝
 窪地の底に
 枝を撓めつ
 熟せる實をば
 森の中をば
 されどフキリップは
 アニイと共に
 此處此森の
 忍びし折の
 真情見ゆる
 娛しく森に
 アニイの答
 聞けばアニイは
 掻き分けて
 己がじし
 折り取りつ
 蒐めては
 こゝかしこ
 まのあたり
 あることを
 下陰に
 悲しさを
 面を上げ、
 遊べるを、
 あらぬまゝ
 哀しげに
 打ちかへす葉の
 なよやかなれど
 栗色なして
 互に呼びつ
 戯れ遊び
 その傍に
 打ち忘れては
 手負の猪を
 思ひ出でしが
 「アレ聞き賜へ、
 勞れまししか
 フキリップは更に
 手を顔にあて
 裏白く
 折れやらぬ
 房々と
 應へつゝ、
 居たりける。
 ありながら
 その昔
 さながらに
 やがて又
 子供等は
 アニイ殿」
 折返し
 俯しぬ、

フキリプはそれと 打見やり
 「船は覆りぬ、 沈みたれ、
 思ひに思ひ わづらひて
 兒等はあはれや 孤兒に
 「そを思ふには あらねども
 兒等のたのしき 聲聞けば
 快からず 思ひけむ
 今は諦め 賜へかし
 御身の生命 ちいめなば
 なるべきものを」 と詰られて
 「如何なる故か 辨へず
 我が淋しさは いやまざる」。

「聞きて賜はれ 奇り添ひて
 思ひ初めけん アニ殿
 得も忘れず 忍ぶれど
 切なる思懐 いつ迄か
 アニにかくぞ 語りける、
 願へば何時の 頃よりか
 月日の影は うつろへど
 包むに餘る 我胸の
 秘めおかるべき、 アニイどの

十年の長き 年月を
 尙存生へて あらむとは
 頼むも空と 思さずや、
 御身が貧しく 便りなく
 心苦しく ア、いかで
 我が心にも 任せぬは
 敏き女性の 御身には
 叶へて妻と なられずや。
 父とぞなりて 兒等を
 父よ父よと 我身をば
 我れも眞の 我兒ぞと
 御身と我と 妹と脊の

音信もあらぬ 彼の人の
 望み得べくも あらぬこと
 さらば聞きませ 我が言葉
 在す状態をば 見る程に
 扶けまほしと 思へども
 そは何故ぞ…… 云はずとも
 覺られつらむ、 我が願
 さらば我身は 心より
 愛しまなむ 今とても
 慕ふ可愛の 幼兒を
 めで親しみて あるなれば。
 變らぬ誓約 堅めなば

この年月の
凡てに恩恵

繁かりし

憂き節々も

忘られて

垂れ賜ふ

大慈の天父に

護られて

楽しく世をば

送り得む。

つくづく思ひ

まはされよ

我れは生計も

富裕にて

縁者もあらず

心勞も

負ふべき責任も

あらぬ身の

慮ふは御身の

上のみぞ

知り賜はずや

筒井筒

振分髪の

幼立をさなだち

睦み遊びし

昔より

我れは御身を

戀せしを。」

語るを聞きて

アニイ女は

言葉やさしく

答へけり、

「御身は天つ

御使も

かくやとばかり

我家をば

恵み賜ひぬ、

大神の

御身の行爲を

嘉あでまして

御身に幸福さいわいの

多かれと

赤心まごころこめて

祈るなり。

嗚呼初變はつへんの

熱き愛

重ねて御身に

捧げつゝ、

イノクの如く

御身をも

愛せむことは

叶ふまじ。」

「イノク殿に

及ばずも

御身の愛情なさけを

蒙らば

我身の願望のぞみ

満ち足らむ」

聞きてアニイは

驚きつ

「ア、フキリプよ

今しはし、

待ちて賜はれ

萬に一

我良人つま歸り

來ましなば、

とは云へイノクは

戻かへるまじ、

されど待ちませ

一ト年を

長くもあらぬ

一ト年を、

尙一ト年を

過こごしなば

事情ことも分明さだかに

なりぬべし

やよ待ち賜へ

今しはし。」

フキリプは聲も

沈みつゝ、

「さらばアニイ殿

今日までの

長の年月

待ちし身の

尙暫時は

忍しのばなむ」

云へばアニイは

打消して

「我身は堅く

誓ちかふなり

今年ぞ

フキリプどの

我身の言葉 堅きごと 御身も待たれよ 一年を」
フキリブもさらば 一年を 待たむ」と詞 つがへける。

こゝに男女は やゝしぼし 言葉もなくて フキリツブは
見上ぐる方の 古塚に 夕榮の影 うすれつゝ
四邊小暗く 風冷えて アニイの身にや 障らめと
心遣ひの 脱りなく 起ち上りつゝ 下手なる
森の中をば 聲高く 呼べば子供等 己がじし
折り拾ひたる 榛實を 提げてぞ登り 來りける。
かくて一同 打ち連れて 麓の里に 下り來て
アニイの門に フキリブは 足を止めて 懇ろに
詞優しく 「アニイ殿 御身の心 哀みに

弱りし折に さまざまの 願事せしは 過てり
我は御身に そむかねど 御身は心に 任されよ」
聞きてアニイは 涙聲 「我れも御身に そむくまじ」。

かく誓約をば 立てしより 過ぎやらす
家事何くれと いそしみて 昔より
年頃慕ひ まつりき」と 語りしフキリブの 言の葉を
さすが嬉しき 女氣の くりかへしつゝ 樂むと
思ひし間に いつしかに またもや秋の めぐり來て
「いざ誓約をば 履みてよ」と フキリブは來り 促しぬ、
「早や一と年と なりしか」と アニイの間に フキリブは
「問ふ迄もなし 榛實は 今ぞ穰れる 野に山に

行きて見ませ」と

促せど

アニイは尙も

「かにかくと

準備もあらむ

軽からぬ

身の振方を

きめんまで

なほ一ト月を

ゆるしませ

ゆめ誓をば

破るまじ

一ト月ぞたゞ

一ト月」と

聞きてフキリップの

眼には

この歳月の

片戀に

やつれし色の

あり／＼と

舌もまはらぬ

醉漢の

如く言葉も

慄えつゝ

「御身の都合

よき折に

御身の都合

よき折に。」

怨まるゝ身も

なか／＼に

情を知らぬに

あらねども

心に泣きて

外面には

すげなきさまに

待遇して

なほも理なき

口實に

變りもやらぬ

フキリップの

かたき心を

ためしつゝ

一ト日／＼と

延ばす間に

また一ト年の

半ばほど

隙ゆく駒と

過ぎにける。

かゝりし程に

はしたなき

人の口の端

かしましく

事あれかしと

望みたる

見込外れし

口惜しさに

さながら己が

身にとりて

怨の種の

ある如く

或はフキリップが

アニイをば

弄びしと

云ひはやし、

又はアニイが

殊更に

思はせ振を

すなりとし、

あるは二人を

諸共に

あざ晒ひけり

空蟬の

浮きたる戀に

眼も眩み

我を忘れし

振舞と、

又或者は

忌はしき

蛇の卵の

それならで

邪推の念に

まつはれて

罵りにけり

二人をば

なほ悪しざまに

云ひなして。

男の童兒は

しかすがに

口には出さぬ

フィリップと

母と夫婦に

なれかしと

望める色は

あり／＼と、

娘は母に

露骨に

搔き口説きけり
 嫁ぎて親子
 鮮麗なりし
 やつるゝさまは
 アニイは己が
 「かくばかり
 兄妹の
 フキリップの
 憫然なり、
 なす行爲と
 我等の慕ふ
 貧苦を救ひ
 顔の色さへ
 かゝる事共
 いたくも思ひ
 彼の人に
 給はれしと。
 衰へつ
 見るにつけ
 惱みける。

やがてある夜の
 寝られぬまゝに
 「我良人イノク
 黒白も分かぬ
 一人我身の
 床を脱け出で
 ことなりき
 アニイ女は
 失せたるか
 夜の幕
 行末を
 燈火を
 心を籠めて
 黙示を下し
 閉づる無明の
 思へばいとゞ
 かゝげてやをら
 祈るらく
 賜はれしと、
 闇の中
 恐ろしく
 聖書をば

物狂はしう
 黙示のほどを
 何處と心
 「棕櫚の樹陰」と
 その意義をば
 不思議や夢に
 上には棕櫚の
 アニは思ひぬ、
 神を賞へて
 正義の口影、
 幸ある人の
 讀めたる跡よ
 手に取りて
 知らばやと
 當もなく
 讀まれたる。
 解き兼ねて
 イノクが
 蓋ひ茂り
 我が良人は
 歌ふらむ、
 こなたなる
 打ち連れて
 と思ふ間に
 神の聖經の
 矢庭に之を
 聖句の上に
 そは何事ぞ
 聖書を閉ぢて
 小高き丘に
 日はあか〜と
 今は榮光の
 彼方に高く
 棕櫚の樹陰は
 「至上處に
 夢は破れぬ、
 言の葉に
 押し披き
 指置けば
 アニイには
 睡りしに
 座を占めつ
 照す見て
 天國に入り
 輝くは
 その往昔
 ホザナよ」と
 今はとて

思ひ定めて

フキリツブを

呼びて言葉も

甲高く

「我等夫婦と

なるべきに

妨となる

とあらし」。

聞くよりフキリツブ

いひけるは

「さらばアニ殿

願はくは

相互の爲めぞ

躊躇はず

即時に我に

嫁がれよ」

かくて二人は

妹と眷の

契固めぬ、

楽しげに

鐘は響きぬ

楽しげに

鐘は響きぬ、

さりながら

アニの胸は

なかく〜に

楽しからじな、

道行けば

誰とは知らず

鷺音の

影身に添ひて

聞ゆれど

何處よりとも

辨へず、

何とも知れず

耳許に

低語く聲の

聞えつゝ、

心騒げば

獨居の

留守も厭へば

唯一人

出て歩くをも

厭ひける。

さては我家に

辿り来て

門に立ち寄り

戸鉦に

手は掛けながら

やゝしばし

立ち淀めるは

何物を

怖ぢ恐れてか、

フキリツブは

かゝる恐怖や

疑惑は

身重になれる

アニには

常の習ひと

心にも

かけで過しぬ、

月満ちて

生れ落ちたる

嬰兒は

母の面貌を

そのまゝに

寫せばさすが

親心

子の可愛さに

数々の

胸の憂慮も

忘られて

フキリツブを今は

一と筋に

慕ひ頼めば

イノツクの

上はいつしか

忘られて

思ひ出る日も

なかりけり。

名なる船に

幸多き

海路渡りぬ、

ビスケイの

さてもイノクは

何方に

流寓ひつるか、

「幸運」と

灣いりえを出づる

荒ぶる浪に

危あやき事も

永とこ常とこの夏の

浪風荒るゝ

變り勝ちなる

熱帯の海

追手の風に

こゝ東洋の

程もなく

もまれつゝ

ありけるが

熱帯の

喜望峯

空の下

過よりつゝ

帆をあげて

港にぞ

東の方に

今にも水に

沈みもやらで

洋なだやすくと

岬をめぐり、

進めば又も

やは吹き止まぬ

黄金の島を

碇卸しし

山をなす

吞まれむと

免れ出で

乗り切りて

晴れ曇り

常夏とこなつの

貿易の

後にしつ

目出たさや。

像など數多
茲にイノクは

一、儲け
購へる

せばやと奇しく
かゝる中にも

珍らしき
忘れぬ

可愛の稚兒の

家苞に

金色の龍

求めける。

歸る船海は

幸薄く

當初はじめの程は

打ち續く

日和麗らに

晴れ渡る

空を仰ぎて

行く船の

小搖ぎもせず

舳をば

飾れる像の

伸び々と

鷺毛とまがふ

細波を

長閑に眺め

わたせしが、

やがて風なぎ

船行かず

さては風向

定まらず、

逆風ひるかぜとも

なりぬれば

逆巻く浪路

はるくと

凌しのぎつ行けば

暴風さへ

襲おそひ來りぬ

月もなき

暗くらき海原

漂たひつ

「巖よ」と叫ぶ

一、聲に

驚おどく間もなく

船碎け

溺なれし人の

多かるに

イノクは二人の

船人と

折れ漂へる

船板に

辛くも身をば
支へつゝ
半夜ばかりも
浮びけむ
東雲の頃
はしなくも、
天産物は
潤澤なれど
人影もなき
絶海の
孤島に流れ
着きにける。

人の生命を
繋ぐべき
料には更に
事欲かじ、
旨しき果實
栗、胡桃
滋食多き
草の根や
自然の樂土に
棲息し
人を恐れぬ
鳥獸
哀れと思ふ
心だに
あらざらむには
近寄りて
捕へんことも
難からじ。
かゝる小島の
海沿の
山の小陰に
棕櫚の葉を
葺きたる小屋を
しつらへぬ、
小屋とは云へど
往昔の
穴居のさまも
偲ばれつ、
エデンの園も
かくもやと
物産り出づる
常夏の

五五

五六

島も三人の
飽き足らぬ
心の餓を
如何にせむ。

三人の中の
一人なる
まだ總角の
若者は
難破の夕
受けたりし
傷に惱みて
五年の
長き月日を
生と死の
境を行きつ
戻りつゝ
臥しつゝあれば
イノク等も
振り捨てかねて
介抱りぬ。
彼れ世を去りて
後なりき
イノク等二人
倒れたる
大樹の幹を
空洞にぞ
印度人等の
なす如く
焼きて船をば
造らむと
イノクの友は
炎熱に
中りてあはれ
死歿りぬ
取り残されて
イノツクは
時機を待てとの
神慮ぞと
畏みてこそ
居たりけれ。

五五

五七

頂までも

下草青き

蜿蜒として

羽の冠と

鳥や胡蝶の

幾世経ぬらむ

海邊にまでも

五彩まばゆき

イノクは見たり、

ものを見ざりき、

人のやさしき

空翔り舞ふ

森々と

森陰の

末遠く

見もまがふ

ひらくと

大木の

蔓れる

花の色、

嗚呼されど

なつかしき

聲音をば

洋鳥の

大樹茂れる

細徑はるかに

天國にまでも

コーコーの樹の

眼まぐるしくも

幹をめぐりつ

げに珍らしき

熱帯の地の

何にもまして

人の面を、

つひに聞かじな、

けたましげの

山々や

見上ぐれば

通ふらむ。

葉陰をば

飛び交はず、

まつはりつ、

旋花草

榮光を

見まほしき

さてはまた

聞ゆるは

叫び聲、

幾里とうねる

大空高く

そよ吹く風に

瀬を早みつゝ

行きつ戻りつ

又は終日

眺め渡せど

今日と暮れまた

旭の光り

紅き千條の

亭午は眞上の

西の方なる

大浪の

枝張りて

そよ／＼と

磯波と

海の邊を

海沿ひの

待ち詫ぶる

明日と明け

棕櫚の葉や

縞を成し、

中空に

海面を

岩に碎くる

花咲き匂ふ

さゝやく聲や、

合ひて碎くる

イノクは一人

洞にこもりて

白帆の影は

一ト日／＼に

羊齒や岩根の

晨朝は東の

高く輝き、

照して紅き

とろろきや、

大木の

溪川の

音ばかり。

行吟ひぬ、

只管に

見えもせで

さし昇る

隙もれて

海原に、

夕暮は

夕榮や、

やがて燦たる
波の響も
紅き日影は
あはれイノクが
星の花
いと高く
照らすなり、
待ちわぶる
空を飾りて
かくして又も
紅き日影は
白帆の影は
夜の海
夜はあけて
照らすなり
見えもせで。

我を忘れて

海原を

眺め入りつゝ

イノツクが

身動きもせぬ

静けさに

黄金色せる

蜥蜴など

這ひ上れども

我心

こゝにあらねば

得もしらず

胸に餘れる

物思ひ

眼に幻と

顯れて

振りさけ見れば

遙かなる

北半球の

故郷に

昔馴染の

人々や

懐憶深き

山川や

幼き我兒の

あどけなき

片言話し、

妻アニイ

小さき住居や
茂れる路の
手飼の駒や、
膚薄寒き
さんさ時雨に
鉛色せる
坂通り、
奥深き
惜みつゝ
朝まだき
秋老けて
海の波
粉磨く小屋や、
庄屋の邸、
賣りたる船や、
置く露しげき
枯葉の匂ひ
低くひくも
青葉陰
さてはまた
霜月の
砂山や、
どんよりと、
幻覺か。

又或時は

我耳の

鳴る間隔にも

遙かなる

彼方にいとゞ

微かなる

鐘の響は

故里の

御寺の鐘よ、

ありし日の

樂しき頃の

惚ばれて

此鐘の音を

聞く時は

何とはしらず

ざはくくと

身を打ちふるへ

やがて又

我に復れば

眼前まのあたり

この美しく
 さりながら
 忌はしき島に
 獨り棲む
 その淋しさに
 なまじひの
 男なりせば
 堪へ兼ねて
 死にたるならむ、
 イノクほど
 信心篤く
 何處にも
 在さざるなき
 大神と
 語らふことの
 叶はずば。

憂さ哀しさの

數かずの

つもりくして

イノツクの

頭に霜ぞ

置きそめぬ、

日の照る朝あした

雨の夕

幾年月を

重ねても

忘れ兼ねたる

妻や兒に

めぐり逢ひ見て

なつかしき

故山の土を

踏みたやと

念ずる甲斐の

ありけるか、

かゝる孤島に

人知れず

朽ち果つる身と

なげきたる

イノクの運の

はからずも

開きそめたり、

さる船の

逆風さかてになやみ

水盡きて

曩にイノクが

乗組みし

「幸運丸」と

同じやう

航路を外れ

此島に

船繫ふなづかりしぬ、

何處とも

如何なる島とも

知らずして。

遠く隔てし

ことなれば

音は聞かねど

黎明しやうめいの

霞罩かすまめたる

離れ島

霧の絶間に

谷水の

流れ認めて

運轉かぢさり士は

船夫かふを送りて

飲水を

求めさせけり

渚路さしちみちに

今上りたる

船人の

こゝよかしこと

己がじし

いとかしましく

立ち騒ぐ、

かゝるところへ

巖窟いわくわの

我住所をば

立ち出で、

髪もおどろに

髭深く

黒く焼けたる

膚の色

これも人かと

恠おどろしげの

衣に身をば

包みつゝ

イノクは磯に

下り立ちて

船夫かふに詞を

かくれども

長の年月

打ち絶えて

六五

六五

人と語らぬ	哀しきは	舌もまはらず	氣は急きて
手眞似脚眞似	さま／＼に	こころみたれど	船夫 <small>ふねびと</small> は
その意 <small>こころ</small> をば	解しかねぬ、	さはれイノクは	人々を
清水流るゝ	川の邊に	伴ひ行きつ、	やゝしばし
船夫同志の	語らふを	聞き居る内に	やうやうに
硬かりし舌も	緩み來て	我が身の上を	語りける、
清水を桶に	汲み入れて	立ち歸る時	船人は
イノクを船に	伴ひぬ、	口ごもりつゝ	これ迄の
我が経歴 <small>みゆゑ</small> を	物語る	イノクの言葉	眞實とは
諾はざりし	人々も	聞きゆくほどに	心をば
ひき入れられて	イノクツの	身をば憫れみ、	衣服をば
新たに與へ	故郷迄	價は取らで	便船を

六五

六五

許したりしが	イノクは	船夫に交らひ	働きて
心に染める	寂寥の	感を消さむと	したりける。
船人は皆	外國の	生れなるより	イノククの
聞き度しと思ふ	音信 <small>おきづね</small> を	傳へ語らむ	者もなし。
覺東なげの	古船の	航海 <small>ふなぢ</small> なかく	拂らす
懶き日數	重ねれば	イノクの夢は	宵々に
故郷の山に	通ふなり、	やがて海原	雲立ちて
殘月淡き	さる晨朝 <small>あした</small>	うすがすみたる	絶壁を
吹き下ろし來る	朝風は	我が懐かしき	イギリスの
露けき野邊を	渡りしと	思へばそとろ	血もをどり
身も打ち慄へ	イノクは	心ゆくまで	吸ひにける。
船長船夫等	便りなき	イノクの身をば	憐みて

金を蒐めて 奥へけり、
イノクが船出 したりける 港にこそは 入りにけれ。
その昔

そこにイノクは 一ト言も

人に語らで ひたすらに

我家をさして 歩みける、

如何なる家ぞ イノツクは

家を有てりやー

我家をさして 歩みける、

午を過ぎたる 空晴れて

日影うらゝに 照らせども

膚薄寒く やがて又

洋につゞける 港口

立ち窄めたる 絶壁を

吹き通し來る 海の霧

天地をこめて 灰色に

曇れる中の 路すぢも

僅かに見えて 右左

枯れし林や 野や島や

廣き牧場も 一ト條の

帯の如くに 見ゆるなり、

近き木立の 霜枯の 枝に鳴くなる 駒鳥の
聲も悲しく、 吹き下ろす 小雨の中を ボタ／＼と
墜つる朽葉に 秋見えて 寂しさまさる 頃なれや、
いよ、狭霧の 立ち置めて 四邊見分かず 辿りしに
やがてあなたに あか／＼と 霧を通して かじやける
里の燈見えて いつしかに 我が故郷に 着きにける。

長き街路を ひそやかに

歩むイノクの 心には

災禍の影 ほの見えつ

辿り着きたる この家こそ

昔アニイト 陸しく

幸多かりし 七十年を

送りて兒等を 儲けたる

家よと様子 窺へど

燈光も漏れず 低語の

聲も聞えず、 「賣家」の

貼札さびし、霧雨に
「さてはアニイは 失せたるか
獨語ちつゝ、あなたへと
すかしてイノク 驚きの
はた他妻と なりしか」と
尙も歩を 運びけり。

六九〇

入江に添へる 波止場へと
忘れぬ旅舎を ころろざし
網代に組みて 古めきし
支の柱 危げに
家なりければ 今頃は
なかるべしとぞ 思ひしに
取り残されし 寡婦なる
瘠する家業の ほそくと
志しけり、 今もなほ
たどり行きけり、 板割を
家こそそれよ 昔より
板は虫喰み 荒れ果てし
朽ち壞たれて 跡方も
家の主人は 亡せられた
ミリアムレイン 唯一人
業をつゞけぬ、 そのかみは

六九五

飲めや歌へと 船人の
いとしめやかなの 旅の宿、
集ひしところ 今はまだ
イノクはこゝに おとなひぬ。

七〇〇

さてもミリアム レイン女は
イノクが獨り 徒然に
心善き人 話好き
イノクがいたく 日にやけて
苦しむ折は 訪ね来て、
やつれしさまに 其人と
腰に梓の 弓を張り
夢にも知らず 此里に
起れる事に 取り交せて
彼れ行きし後 その家に
ありし事共 語りける、
赤子の失せし 事やまた
生計乏しく なりたれば
フキリプが兒等を 學校へ
送りし事や フキリツプが 長の年月
アニイ女の ためらひ勝に アニイをば
慕ひし事や 承諾ひて

七〇五

夫婦となりし

その後

フキリップの子供

生れにし

事の後先

語りける。

イノクは色も

動かさず

聞き居たりけり、

イノクをば

見守る人の

ありもせば

語る人ほど

心をば

動かさざりしと

思ふべし。

されど話を

聴きたへて

「哀れの人よ

イノクは

棄てられにけり、

亡せけり」と

霜置く頭

打ふりて

感に勝へざる

如くにて

「棄てられにけり

亡せけり」と

繰り返しける

又深き

吐息と共に

「亡せけり」と。

さはれイノクは

我妻の

顔見まほしく

「願はくは

あはれ再び

アニイ女の

戀しき面

見るを得て

幸多き状態

知らばや」と

思ひ立ちては

なか／＼に

いやまし暮る

戀しさに

今は堪へかね

立ち出づる

黄昏時の

薄明り、

物哀れなる

霜月の

淋しき丘に

ただ一人

登り行きつゝ

下手なる

里の景色を

眺むれば

胸にむらがる

百千なす

ありし昔の

懐憶は

言葉にたへて

ものかなし。

やがてあなたの

フキリップの

家の窓より

あか／＼と

射す燈火に

イノツクは

迷ひ出でけり、

洋渡る

鳥を迷はす

燈臺の

火を慕ひ來て

生命をば

奪ふものぞと

露知らず

我れと我身を

玻璃窓に

いとゞ激しく

打當てゝ

生命を隕す

鳥にしも

譬へつべきか

イノツクは

燈光を目標に

歩みける。

フキリブの家は 往還に
 行き盡したる 山の際
 茂るがまゝの 荒地へと
 垣匝らせる 庭園の
 昔ながらの 常盤樹や
 これをめぐりて 小石をば
 また一條は 中央を
 イノクは央の 小徑をば
 塀に沿ひつゝ 蹠音を
 よしなきことよ さらでだに
 いとど増すべき 状態を

向ひて建てり、
 屋後の方は 草や樹の
 通ふ枝折戸 雅びたる
 手入れも届き 生ひ茂る
 水松の一樹 美しく
 布き詰めたりし 小徑あり
 あなたへ縦に 通ふなり
 辿らで水松の 樹陰なる
 偷みて忍び 寄りにけり、
 身に負ひ餘る 悲哀を
 眺めてイノク 佇みぬ。

輝くばかり
 心地よげなる
 見擬ひもせぬ
 人なりけるが
 赤兒を膝に
 さし覗きたる
 すらりと高き
 指し上げし手の
 指輪を結び
 肥えくびれたる
 あせれどやはか
 笑ひさゝめく

拭はれし
 暖爐の
 フキリブは
 今はまた
 かき載せて
 姉嬢
 立姿
 指尖に
 着けたるを
 手を舉げて
 捉へ得ぬ
 賑はしさ、

銀の器物や
 卓に光りの
 右手の方を
 あはれ昔は
 身も健全に
 坐れる父の
 齡は母に
 金髪の色
 垂れ下りたる
 振りて赤兒に
 赤兒は之を
 様に一座は

盃や
 照り添ひて
 眺むれば
 失戀の
 色もよく
 肩越しに
 ゆづれども
 つやゝかに
 リボンには
 からかへば
 取らばやと
 興に入り

輝くばかり
 心地よげなる
 見擬ひもせぬ
 人なりけるが
 赤兒を膝に
 さし覗きたる
 すらりと高き
 指し上げし手の
 指輪を結び
 肥えくびれたる
 あせれどやはか
 笑ひさゝめく

拭はれし
 暖爐の
 フキリブは
 今はまた
 かき載せて
 姉嬢
 立姿
 指尖に
 着けたるを
 手を舉げて
 捉へ得ぬ
 賑はしさ、

暖爐の右に
己が傍に
童子と詞
語れるならむ

母アニイ
起ち居たる
交はしつゝ
童兒は

赤兒の方を
丈高く身も
何か知らねど
いと嬉しげに

眺めつゝ
逞しき
よき事を
ほゝるみぬ。

死せる我身は
人の妻なり、
赤兒は父の
平和の色や
丈高くして
繼父ながら
仲睦まじく

甦り
我妻の
膝の上、
樂しさは
美しく
子供等に
一同が

今來て見れば
兒なれど我れには
家内に満てる、
溢るゝばかり
生ひ立ちしさま、
眞の父と
暮せるさまは

我妻は
兒にあらぬ
温き
我兒等の
フリブが
慕はれて
かねてより

宿の女將の
見ては聞きしに
イノクは眼
辛くも身をば
上げむとなせし
世の終末の喇叭
瞬くひまに

語りつる
いやまさる
めくるめき
支へつゝ
程なりき、
さながらに
散らましを。

事にしあれど
心の痛に
倒れむとして
苦痛に餘る
若し今イノク
かゝる家庭の

眼のあたり
堪へがたく、
樹の枝に
叫聲をば
叫びなば
たのしさも

さればイノクは
盗人のごと
氣を失ひて
盲人の如く
枝折戸さして

砂利路の
ひそやかに
打ち倒れ
手さぐりに
歩み寄り

音を出すを
引き返せしが
見出されむかと
塀を傳ひて
病みたる人の

恐れつゝ
みちすがら
虞れつゝ
漸くに
臥してある

部屋の戸のごと 音させて
かくてイノクは ひそやかに
戸をば披きて 閉しつゝ
一人野原に 出でにける。

こゝにイノクは 膝づき
弱れる脚の 力なく
指を大地に 埋めしまゝ
祈らむとこそ 思ひしが
がばとばかりに 倒れつゝ
赤心こめて 祈る聲、
船人が 大神よ

「あゝ堪へ難や 堪へ難や
島より伴ひ 戻りしぞ、
讃むべき聖主よ 高しらす
天つ御父よ 彼の島に
如くに今も 尙しばし
助け賜へや、 アニイには
包み了する 力をば

淋しき身をば さゝへたる
淋しき此身を さゝへませ
語らで獨り 我が胸に

七六

七五

與へ賜はれ 願はくば
心の平和 亂さず
兒等には詞を 交はさんか
詞交さば 穂に出でむ
あゝ母アニイに よく似たる
娘よ、童、
いとしの兒！

こゝにイノクは 言の葉も
今は盡き果て やゝしばし
やがて己に 復りつゝ
一筋長く 幅狭き
萎え勞れたる 頭脳にも
歌の結びの 句の如く
「アニイに語らで
思も絶えぬ 體力さへ
氣を失ひて 倒れしが
一人淋しく 辿り行く
港の町の 道すがら
忘れじとにや 折り返へす
「アニイに語らで ただひとり

七九〇

七九五

淋しき胸に 秘めなむ」と 繰り返しつゝ、 行きにける。

されどイノクは あながちに 慰籍なきに あらざりき、

男々しく思ひ 定めたる 堅き心に 自らを

奮ひ勵まし、 海洋の 最中に湧ける 眞清水の

泉とばかり、 我胸に 溢るゝ精靈の 活ける水

憂き世の中の 数々の 苦痛の炎 凌がする

奇しき祈禱の 効験にて 伊ノクは生命 永らへぬ。

「御身の語りし 粉磨場の 妻は先なる 良人なほ

生き永らへて あらむかと 心が、りに 思はずや」

問へば主婦は 「さればとよ あはれアニは 如何ばかり

思ひ惱める、 若し御身が 伊ノクが死ぬるを 眼前

見たりとアニに 語りなば アニの心 いかばかり

安からましを」と 答ふるを 聞きてイノクは 胸の内

「かく永生へて ある程は アニにあかさで 我はたゞ

主の御招を 待たばやと」 思ひ定めぬ。 伊ノクは

男よ、いかで 女々しくも 人の慈悲に 頼らむと

如何なる業も 厭ひなく 力の限り 働きて

生計の資を 得たりけり。 桶屋ともなり 大工とも

漁夫の 網作る 手傳となり あるは又

その頃未だ 貿易の 盛ならざる 時なれば

多くもあらぬ 船荷をば 上げ下しする 労働を

助けなどして 何事と 業を選ばで 働けば

その日その日の 微かなる 生活に事は 缺かざりき。

されどイノクは、	孤獨 <small>ひそり</small> の、	己れの爲に	するよりは
他に望も	あらぬ身の	何樂みに	働かむ
種もあらねば	やう／＼に	その精根も	衰へて
めぐる月日の	いつしかに	歸り來てより	一ト年と
なりし頃には	衰弱の	募り來りて	日一ト日
體力 <small>ちから</small> も失せて	勞働 <small>はたらき</small> も	叶はぬほどに	家にのみ
引籠りしが	起居 <small>たちか</small> さへ	今は心の	まゝならず
遂には床に	臥したれど	心雄々しき	イノックは、
荒磯 <small>あらいそ</small> に船を	乗り揚げて	生くる望も	絶え果てし
折しも海原	吹き捲くる	嵐の中を	救助船
近づき來るを	見るよりも	尙喜びて	イノックは
すべてを墓に	葬らん	死の近づくを	迎へける。

八五

八三

「我れ長逝 <small>ながし</small> りし	後にこそ	アニイは知らめ	末期迄 <small>おわり</small>
變らで彼女 <small>かみ</small> を	愛せし」と	思へばやゝに	近づける
死出の山路も	なつかしく	望の光り	輝きぬ、
イノックは聲も	高らかに	主婦 <small>あしな</small> を招 <small>よ</small> びて	言ひけるは
「主婦よ、我は	唯獨り	胸にひめたる	事ぞある
お身に語らむ	その前に	聖書 <small>みよみ</small> にかけて	誓ひませ、
『我れ世を去りし	後までは	人に告げじ』と	誓ひませ。』
聞きて主婦は	せき込みて、	「死ぬとや御身 <small>おみ</small> は	などてかく
心弱くも	宣ふぞ、	我等はお身を	健全 <small>すこやか</small> に
なしまゐらせむ	ものを、君」	なだむる詞	聞き流し
イノクは尙も	嚴かに	聖書にかけて	誓へよ」と
いへば主婦は	驚きて	いはるゝまゝに	誓ひけり。

八五

八四

イノクは問ひぬ、

「此の里の

イノクアーデンを知れりや」と。

「知るやと我に

聞きますか、

あなたを歩む

姿をも

見まがはぬまで

よく知りぬ、

思ひぞ出づる

彼の人が

頭を高く

身を反らし

誰憚らず

勇ましく

歩める姿

忘れじ」。

聞きてイノクは

ゆるやかに

いと哀れなる

話振り、

「その勇ましの

イノツクの

頭も今は

うなだれて

彼を憚る

人もなし

早三日とは

永らへぬ

我身にあれば

何事を

秘め包むべき、

我れこそは

そのイノクよ」と

聞くよりも

疑ひ且つは

驚きて

主婦は聲も

甲高く

「御身がアーデン？

アーデンは

御身なりとやー

いかで〜
御身より

真なるべき

彼の人は

一尺程も

御身より

高きものを」と

詰られて、

「神はイノクを

御身が今

見らるゝ如く

し賜ひぬ、

憂き事多く

友はなく

獨り住みにし

淋しさに

かゝる姿と

なりたれど

偽りならじ

我身こそ

彼れイノツクよ

アニイ リイ

今はその名も

變りつる

女を娶りし

イノツクよ、

主婦よ、こゝに

しばしの間

我が物語

聞き給へ」。

かくてイノツクは

ミリアムに

航海の事や、

船沈み

離れ小島に

唯一人

淋しく棲みし

ことやまた

歸り來りて

アニイをば

かいま見たりし

事共や、

立てし誓を

我胸に

堅く守りし

苦しさを

語れば主婦は

イノツクの

心の内を

想ひやり

落つる涙を

止めあへず、

誓ひし」

なかりせば

走り廻りて
イノツクの
身の上のこと
里人に
告げ知らせむと
思ひつゝ
「息ある間に
和子達に
今生の別れ
告げたまへ、
呼び参らせむ」と
起ち上る、
イノクもさすが
恩愛の
羈に曳かれ
ミリアムの
詞のまゝに
まかせしが
やがて心を
取り直し

「臨終の際ぞ
安らげく
終らむものを、
我が心
擾し賜ふな、
死ぬる迄
心に固く
定めつる
誓約を果し
得させてよ、
しづかに暫時
我が語る
詞を篤と
聞き給へ、
あゝ舌の根の
動く間も
今は僅かと
覺ゆなり。
御身アニイに
逢ひもせば
親しくかたり
給はれよ、
イノクはアニイの
身の幸を

祈りつゝ世を
去りにしと、
義理の柵
越えかねて
あれど心は
今もなほ
可愛の妻と
慕ひつゝ
逝けりとアニイに
語りてよ、
又我が娘、
母人に
似たる娘や
息子にも、
父は臨終の
折までも
二人の上に
幸あれと
熱き祈りを
續けしと
忘れて告げて
たまはれよ。
またフキリブにも
イノツクが
感謝の念を
傳へてよ、
フキリブがなせし
事はみな
我が家の者の
身の幸を
思ひ圖りて
せしなれば。
されど此世に
父と兒の
縁も薄き
我が兒等が
我れ亡せし後
死顔を
見むと願はば
その願
止め給ふな、
我れはげに
兒等の父なり、
さはあれど
アイニに我を
見せられな、
我がやつれたる
面容は

思ひの種と	なりぬべし。	今我れ行かむ	天つ世に
我が血を分けし	稚兒一人	我を待つらむ、	此髪は
その兒の遺愛	母アニイ	剪りて與へし	ものなるよ。
長の年月	片時も	膚身離さず	我墓に
入るべき折も	持ち行かむ、	かく思ひつゝ、	ありつれど
思へば我兒と	榮ある	天つ御國に	相も見む
近きにあれば	此髪を	我れ携ふる	要もなし、
これを御身に	預くれば	アニイに渡し	たび給へ
可愛の稚兒の	思出と	なるのみならで、	我れは實に
紛れもあらぬ	イノクぞと	アニイの疑	霧れぬらむ。」

こゝにイノクは 黙せしが、
ミリアムレインが 快く

云はれしまゝに	總てをば	諾ふ顔を	キツト見て
同じ詞を	繰り返し	いとねんごろに	頼みけり、
主婦も更に	繰り返し	同じ誓を	立てにける。

三日過ぎたる	夜なりけり	色蒼さめて	睡りたる
イノクが身をも	動かさず	まどろみがちの	をりくゝに
傍に主婦も	看護りつゝ、	響は高く	いや高く
外なる海の	波荒れて	いと恐ろしく	鳴り渡る、
港の内の	家々に	雙手をひろく	さし延べて
イノク眼さめて	起き上り	「帆影よ、帆影	あゝ我れは
聲高らかに	叫びける、		

救はれたり」と、 そのまゝに 僵れて遂に こと切れぬ。

かくて雄々しく 勇ましき 魂は上りぬ 天つ世に。

フキリブを始め アニイ等が 眞情こめし 葬式は

小さき港に 前例なく 手厚きものにぞ ありにける。

哀む者は福なり その人は安慰を得べければ也

柔和なる者は福なり その人は地を嗣ぐことを得べければなり

和平を求むる者は福なり その人は神の子と稱へらるべければなり

馬太傳 五章

24 (1)



ENOCH ARDEN

TRANSLATED

BY

YASUSHI HASEGAWA

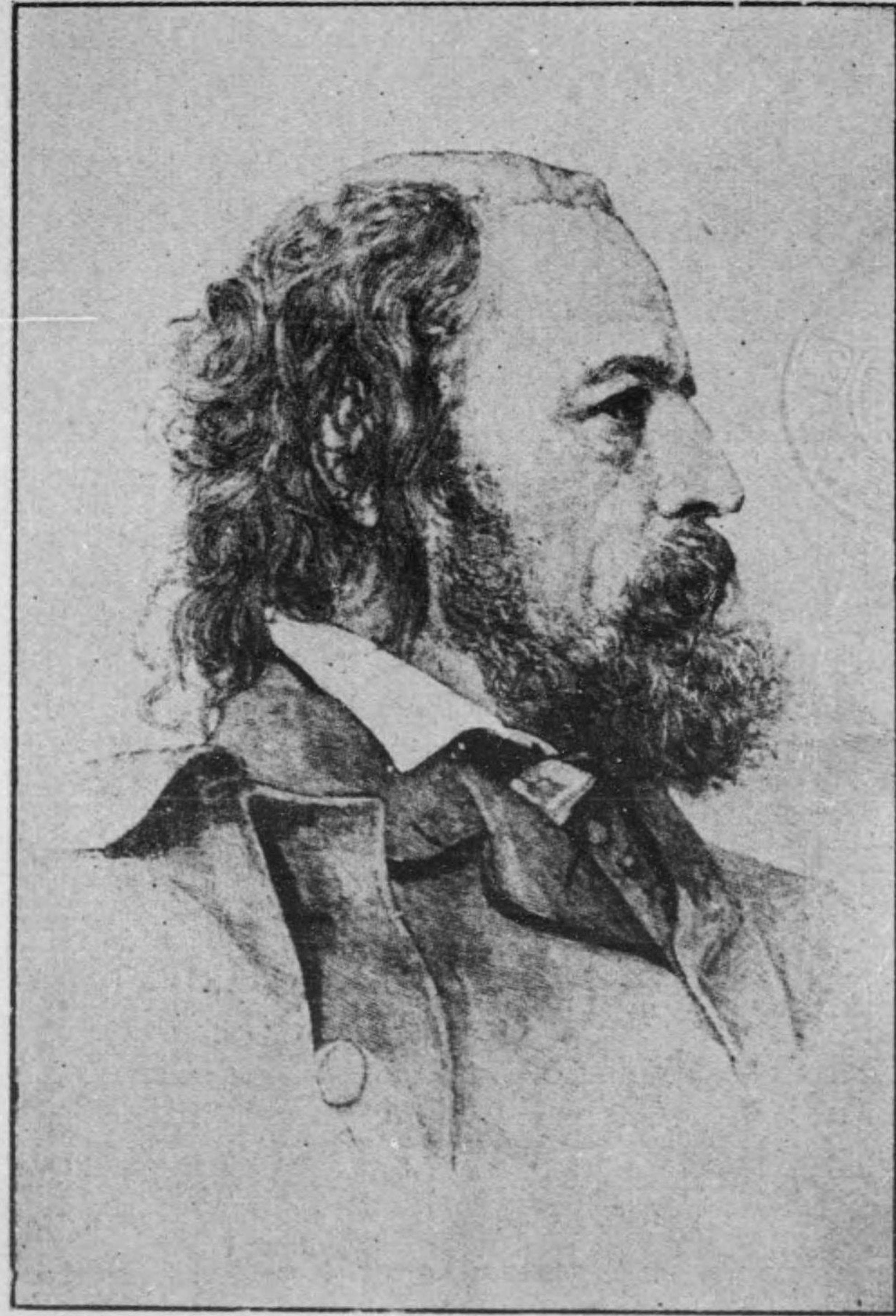


PUBLISHED

BY

SASAGAWA, TOKYO





Alfred Lord Tennyson

ENOCH ARDEN に就いて

Tennyson 卿の作中 Enoch Arden 程に汎く讀まれたものはあるまい。外國語に翻譯されたこと丁抹、獨逸、和蘭、佛蘭西、ボヘミヤ、伊太利、匈牙利、西班牙の諸國に涉り、我が邦語にも已に二三種の譯書が出て居る。

此詩の材料は Thomas Woolner (英吉利の彫刻家にして詩人) が Tennyson に話した譚から採つたので多少の潤色はあつても大體は事實であると傳へられてゐる。

Enoch Arden は格調が非常に高い詩ではない。田園詩の調で平民的の生活を敘述したのであるから奇拔とか雄大とか云ふ趣には乏しい。が、主人公イノツクが硬直にして温情に富み艱苦に際會して、人を責めず、天を怨まず、常に己を後にして人を先にし、高潔なる俠氣を以つて生涯を一貫したところ、實に真正なる Christian の標本である。否、豈獨り Christian とのみ云はんや、眞男子の面目はかくこそありたいと思はしむるのである。

下に、原作發表當時の諸方面の批評を摘録して讀者の參考に資する。

Enoch Arden may be classed as among the best of the poet's works. Taking all its merits into consideration, probably, no other of his poems can reach above it. It has length enough to show sustained effort; the story is dramatic,

and told with a simple and complete effect; and the parts are, first of all, in perfect subordination to the whole and to one another; secondly, are beautiful in themselves.

—*The Quarterly Review.*

The hero, Enoch Arden, is beyond rivalry the principal personage in the tale, and his heroism is at once of the loftiest and simplest order. He is an unlucky man but invincible; his brain is ordinary; morally he is sublime. His duty, however hard it may be, is always clear to him; and without any consciousness that he is acting heroically, he always proves equal to it. Harder duty, however, has seldom fallen to any man than his. He had never accused God; he had never unjustly upbraided man; in the long roll of Christian heroes there is not inscribed a truer hero than Enoch Arden.

—*Lessons from the Masters.*

Enoch's grand self-sacrifice, as recovering from the shock of seeing what only to hear of had been woe sufficient, he repeats his resolution to himself, "Not to tell her, never to let her know:" all these things in the hands of a French writer of the sentimental type would have been morbidly painful. Tennyson so tells them that they elevate our minds by the sight of a spirit refining to its highest perfection in the purgatorial fires of earth.

—*Blackwood's Magazine.*



ENOCH ARDEN

By Alfred, Lord Tennyson

Long lines of cliff breaking have left a chasm; 1
And in the chasm are foam and yellow sands;
Beyond, red roofs about a narrow wharf
In cluster; then a moulder'd church; and higher
A long street climbs to one tall-tower'd mill; 5.
And high in heaven behind it a gray down
With Danish barrows; and a hazelwood,
By autumn nutters haunted, flourishes
Green in a cuplike hollow of the down.

Here on this beach a hundred years ago, 10.
Three children of three houses, Annie Lee,
The prettiest little damsel in the port,
And Philip Ray the miller's only son,
And Enoch Arden, a rough sailor's lad
Made orphan by a winter shipwreck, play'd 15.
Among the waste and lumber of the shore,
Hard coils of cordage, swarthy fishing-nets,
Anchors of rusty-fluke, and boats up-drawn;
And built their castles of dissolving sand
To watch them overflow'd, or following up 20.
And flying the white breaker, daily left
The little footprint daily wash'd away.

A narrow cave ran in beneath the cliff:
In this the children play'd at keeping house.
25. Enoch was host one day, Philip the next,
While Annie still was mistress; but at times
Enoch would hold possession for a week:
"This is my house and this my little wife."
"Mine, too," said Philip, "turn and turn about":
30. When, if they quarrell'd, Enoch stronger-made
Was master; then would Philip, his blue eyes
All flooded with the helpless wrath of tears,
Shriek out "I hate you, Enoch," and at this
The little wife would weep for company,
35. And pray them not to quarrel for her sake,
And say she would be little wife to both.

But when the dawn of rosy childhood past,
And the new warmth of life's ascending sun
Was felt by either, either fixt his heart
40. On that one girl; and Enoch spoke his love,
But Philip loved in silence; and the girl
Seem'd kinder unto Philip than to him;
But she loved Enoch; tho' she knew it not,
And would if ask'd deny it. Enoch set
45. A purpose evermore before his eyes,
To hoard all savings to the uttermost,
To purchase his own boat and make a home
For Annie: and so prosper'd that at last
A luckier or a bolder fisherman,
50. A carefuller in peril, did not breathe

For leagues along that breaker-beat'en coast
Than Enoch. Likewise had he served a year
On board a merchantman, and made himself
Full sailor; and he thrice had plucked a life
From the dread sweep of the down-streaming seas: 55.
And all men look'd upon him favourably:
And ere he touch'd his one-and-twentieth May
He purchased his own boat, and made a home
For Annie, neat and nestlike, halfway up
The narrow street that clamber'd toward the mill. 60.

Then, on a golden autumn eventide,
The younger people making holiday,
With bag and sack and basket, great and small,
Went nutting to the hazels. Philip stay'd
(His father lying sick and needing him) 65.
An hour behind; but as he climb'd the hill,
Just where the prone edge of the wood began
To feather toward the hollow, saw the pair,
Enoch and Annie, sitting hand-in-hand,
His large gray eyes and weather-beaten face 70.
All-kindled by a still and sacred fire,
That burn'd as on an altar. Philip look'd,
And in their eyes and faces read his doom;
Then, as their faces drew together, groan'd,
And slipt aside, and like a wounded life 75.
Crept down into the hollows of the wood;
There, while the rest were loud in merrymaking,
Had his dark hour unseen, and rose and past
Pearing a lifelong hunger in his heart.

80. So these were wed, and merrily rang the bells,
And merrily ran the years, seven happy years,
Seven happy years of health and competence,
And mutual love and honourable toil ;
With children ; first a daughter. In him woke,
85. With his first babe's first cry, the noble wish
To save all earnings to the uttermost,
And give his child a better bringing-up
Than his had been, or hers ; a wish renew'd,
When two years after came a boy to be
90. The rosy idol of her solitudes,
While Enoch was abroad on wrathful seas,
Or often journeying landward ; for in truth
Enoch's white horse, and Enoch's ocean-spoil
In ocean-smelling osier, and his face,
95. Rough-redden'd with a thousand winter gales,
Not only to the market-cross were known,
But in the leafy lanes behind the down,
Far as the portal-warding lion-whelp,
And peacock-yewtree of the lonely Hall,
100. Whose Friday fare was Enoch's ministering.

Then came a change, as all things human change.
Ten miles to northward of the narrow port
Open'd a larger haven : thither used
Enoch at times to go by land or sea ;
105. And once when there, and clambering on a mast
In harbour, by mischance he slipt and fell :

A limb was broken when they lifted him ;
And while he lay recovering there, his wife
Bore him another son, a sickly one ;
Another hand crept too across his trade 110.
Taking her bread and theirs : and on him fell,
Altho' a grave and staid God-fearing man,
Yet lying thus inactive, doubt and gloom.

He seem'd as in a nightmare of the night,
To see his children leading evermore 115.
Low miserable lives of hand-to-mouth,
And her, he loved, a beggar : then he pray'd
" Save them from this, whatever comes to me."
And while he pray'd, the master of that ship
Enoch had served in, hearing his mischance, 120.
Came, for he knew the man and valued him,
Reporting of his vessel China-bound,
And wanting yet a boatswain. Would he go ?
There yet were many weeks before she sail'd,
Sail'd from this port. Would Enoch have the place ? 125.
And Enoch all at once assented to it,
Rejoicing at that answer to his prayer.

So now that shadow of mischance appear'd
No graver than as when some little cloud
Cuts off the fiery highway of the sun, 130.
And isles a light in the offing : yet the wife—
When he was gone—the children—what to do ?

Then Enoch lay long-pondering on his plans ;
To sell the boat—and yet he loved her well—
135. How many a rough sea had he weather'd in her !
He knew her, as a horseman knows his horse—
And yet to sell her—then with what she brought
Buy goods and stores—set Annie forth in trade
With all that seamen needed or their wives—
140. So might she keep the house while he was gone.
Should he not trade himself out yonder ? go
This voyage more than once ? yea twice or thrice—
As oft as needed—last, returning rich,
Become the master of a larger craft,
145. With fuller profits lead an easier life,
Have all his pretty young ones educated,
And pass his days in peace among his own.

Thus Enoch in his heart determined all :
Then moving homeward came on Annie pale,
150. Nursing the sickly babe, her latest-born.
Forward she started with a happy cry,
And laid the feeble infant in his arms ;
Whom Enoch took, and handled all his limbs,
Appraised his weight and fondled father-like,
155. But had no heart to break his purposes
To Annie, till the morrow, when he spoke.

Then first since Enoch's golden ring had girt
Her finger, Annie fought against his will :
Yet not with brawling opposition she,

But manifold entreaties, many a tear, 160.
Many a sad kiss by day by night renew'd
(Sure that all evil would come out of it)
Besought him, supplicating, if he cared
For her or his dear children, not to go.
He not for his own self caring but her, 165.
Her and her children, let her plead in vain ;
So grieving held his will, and bore it thro.'

For Enoch parted with his old sea-friend,
Bought Annie goods and stores, and set his hand
To fit their little streetward sitting-room 170.
With shelf and corner for the goods and stores.
So all day long till Enoch's last at home,
Shaking their pretty cabin, hammer and axe,
Auger and saw, while Annie seem'd to hear
Her own death-scaffold raising, shrill'd and rang, 175.
Till this was ended, and his careful hand,—
The space was narrow,—having order'd all
Almost as neat and close as Nature packs
Her blossom or her seeding, paused ; and he,
Who needs would work for Annie to the last 180.
Ascending tired, heavily slept till morn.

And Enoch faced this morning of farewell
Brightly and boldly. All his Annie's fears,
Save, as his Annie's, were a laughter to him.
Yet Enoch as a brave God-fearing man 185.
Bow'd himself down, and in that mystery
Where God-in-man is one with man-in-God,

- Pray'd for a blessing on his wife and babes
Whatever came to him: and then he said
190. "Annie, this voyage by the grace of God
Will bring fair weather yet to all of us.
Keep a clean hearth and a clear fire for me,
For I'll be back, my girl, before you know it."
Then lightly rocking baby's cradle "and he,
195. This pretty, puny, weakly little one,—
Nay—for I love him all the better for it—
God bless him, he shall sit upon my knees
And I will tell him tales of foreign parts,
And make him merry, when I come home again.
200. Come, Annie, come, cheer up before I go."

Him running on thus hopefully she heard,
And almost hoped herself; but when he turn'd
The current of his talk to graver things
In sailor fashion roughly sermonizing
205. On providence and trust in Heaven, she heard,
Heard and not heard him; as the village girl,
Who sets her pitcher underneath the spring,
Musing on him that used to fill it for her,
Hears and not hears and lets it overflow.

210. At length she spoke "O Enoch, you are wise;
And yet for all your wisdom well know I
That I shall look upon your face no more."

"Well then," said Enoch, "I shall look on yours,
Annie, the ship I sail in passes here,

(He named the day) get you a seaman's glass, 215.
Spy out my face and laugh at all your fears."

But when the last of those last moments came,
"Annie, my girl, cheer up, be comforted,
Look to the babes, and till I come again
Keep everything shipshape, for I must go. 220.
And fear no more for me; or if you fear
Cast all your cares on God; that anchor holds.
Is He not yonder in those uttermost
Parts of the morning? if I flee to these
Can I go from Him? and the sea is His, 225.
The sea is His: He made it."

Enoch rose,
Cast his strong arms about his drooping wife,
And kiss'd his wonder-stricken little ones;
But for the third, the sickly one, who slept 230.
After a night of feverous wakefulness,
When Annie would have raised him, Enoch said
"Wake him; not; let him sleep; how should the child
Remember this?" and kiss'd him in his cot.
But Annie from her baby's forehead clipt 235.
A tiny curl, and gave it: this he kept
Thro' all his future; but now hastily caught
His bundle, waved his hand, and went his way.

She, when the day, that Enoch mention'd, came,
Borrow'd a glass, but all in vain: perhaps 240.

She could not fix the glass to suit her eye ;
Perhaps her eye was dim, hand tremulous ;
She saw him not : and while he stood on deck
Waving, the moment and the vessel past.

245. Ev'n to the last dip of the vanishing sail
She watch'd it, and departed weeping for him ;
Then, tho' she mourn'd his absence as his grave,
Set her sad will no less to chime with his,
But throve not in her trade, not being bred
250. To barter, nor compensating the want
By shrewdness, neither capable of lies,
Nor asking overmuch and taking less,
And still foreboding "what would Enoch say ?"
For more than once, in days of difficulty
255. And pressure, had she sold her wares for less
Than what she gave in buying what she sold :
She fail'd and sadden'd knowing it ; and thus,
Expectant of that news which never came,
Gain'd for her own a scanty sustenance,
260. And lived a life of silent melancholy.

Now the third child was sickly-born and grew
Yet sicklier, tho' the mother cared for it
With all a mother's care : nevertheless,
Whether her business often call'd her from it,
265. Or thro' the want of what it needed most,
Or means to pay the voice who best could tell
What most it needed—howsoe'er it was,

After a lingering,—ere she was aware,—
Like the caged bird escaping suddenly,
The little innocent soul flitted away. 270.

In that same week when Annie buried it,
Philip's true heart, which hunger'd for her peace
(Since Enoch left he had not look'd upon her),
Smote him, as having kept aloof so long.
"Surely," said Philip, "I may see her now, 275.
May be some little comfort ;" therefore went,
Past thro' the solitary room in front,
Paused for a moment at an inner door,
Then struck it thrice, and, no one opening,
Enter'd ; but Annie, seated with her grief, 280.
Fresh from the burial of her little one,
Cared not to look on any human face,
But turn'd her own toward the wall and wept.
The Philip standing up said falteringly,
"Annie, I came to ask a favour of you." 285.
He spoke ; the passion in her moan'd reply
"Favour from one so sad and so forlorn
As I am !" half abash'd him ; yet unask'd,
His bashfulness and tenderness at war,
He set himself beside her, saying to her : 290.
"I came to speak to you of what he wish'd,
Enoch, your husband ; I have ever said
You chose the best among us—a strong man :
For where he fixt his heart he set his hand
To do the thing he will'd, and bore it thro.' 295.

And wherefore did he go this weary way,
And leave you lonely? not to see the world—
For pleasure?—nay, but for the wherewithal
To give his babes a better bringing-up
300. Than his had been, or yours: that was his wish.
And if he come again, vext will he be
To find the precious morning hours were lost.
And it would vex him even in his grave,
If he could know his babes were running wild
305. Like colts about the waste. So, Annie, now—
Have we not known each other all our lives?
I do beseech you by the love you bear
Him and his children not to say me nay—
For, if you will, when Enoch comes again
310. Why then he shall repay me—if you will,
Annie—for I am rich and well-to-do.
Now let me put the boy and girl to school:
This is the favour that I came to ask.”

Then Annie with her brows against the wall
315. Answer'd “I cannot look you in the face;
I seem so foolish and so broken down,
When you came in my sorrow broke me down;
And now I think your kindness breaks me down;
But Enoch lives; that is borne in on me:
320. He will repay you: money can be repaid;
Not kindness such as yours.”

And Philip ask'd
“Then you will let me, Annie?”
There she turn'd,
She rose, and fixt her swimming eyes upon him, 325.
And dwelt a moment on his kindly face,
Then calling down a blessing on his head
Caught at his hand, and wrung it passionately,
And past into the little garth beyond.
So lifted up in spirit he moved away. 330.

Then Philip put the boy and the girl to school,
And bought them needful books, and everyway,
Like one who does his duty by his own,
Made himself theirs; and tho' for Annie's sake,
Fearing the lazy gossip of the port, 335.
He oft denied his heart his dearest wish,
And seldom crost her threshold, yet he sent
Gifts by the children, garden-herbs and fruit,
The late and early roses from his wall,
Or conies from the down, and now and then, 340.
With some pretext of fineness in the meal
To save the offence of charitable, flour
From his tall mill that whistled on the waste.

But Philip did not fathom Annie's mind,
Scarce could the woman when he came upon her, 345.
Out of full heart and boundless gratitude
Light on a broken word to thank him with.
But Philip was her children's all-in-all;

From distant corners of the street they ran
350 To greet his hearty welcome heartily;
Lords of his house and of his mill were they;
Worried his passive ear with petty wrongs
Or pleasure, hung upon him, play'd with him
And call'd him Father Philip. Philip gain'd
355 As Enoch lost; for Enoch seem'd to them
Uncertain as a vision or a dream,
Faint as a figure seen in early dawn
Down at the far end of an avenue,
Going we know not where: and so ten years,
360 Since Enoch left his hearth and native land,
Fled forward, and no news of Enoch came.

It chanced one evening Annie's children long'd
To go with others, nutting to the wood,
And Annie would go with them; then they begg'd
365 For Father Philip (as they called him) too:
Him like the working bee in blossom-dust,
Blanch'd with his mill, they found; and saying to him
"Come with us, Father Philip" he denied;
But when the children pluck'd at him to go,
370 He laugh'd, and yielded readily to their wish,
For was not Annie with them? and they went.

But after scaling half the weary down,
Just where the prone edge of the wood began
To feather toward the hollow, all her force
375 Fa'l'd her; and sighing, "Let me rest" she said:

So Philip rested with her well-content;
While all the younger ones with jubilant cries
Broke from their elders, and tumultuously
Down thro' the whitening hazels made a plunge
To the bottom, and dispersed, and bent or broke 380.
The lithe reluctant boughs to tear away
Their tawny clusters, crying to each other
And calling, here and there, about the wood.
But Philip sitting at her side forgot
Her presence, and remember'd one dark hour 385.
Here in this wood, when like a wounded life
He crept into the shadow: at last he said,
Lifting his honest forehead, "Listen, Annie,
How merry they are down yonder in the wood.
Tired, Annie?" for she did not speak a word. 390.
"Tired?" but her face had fall'n upon her hands;
At which, as with a kind of anger in him,
"The ship was lost," he said, "the ship was lost!
No more of that! Why should you kill yourself
And make them orphans quite?" And Annie said 395.
"I thought not of it: but I know not why—
Their voices make me feel so solitary."

The Philip coming somewhat closer spoke.
"Annie, there is a thing upon my mind,
And it has been upon my mind so long, 400
That tho' I know not when it first came there
I know that it will out at last. O Annie,
It is beyond all hope, against all chance,

That he who left you ten long years ago
405. Should still be living; well then—let me speak.
I grieve to see you poor and wanting help:
I cannot help you as I wish to do
Unless—they say that women are so quick—
Perhaps you know what I would have you know—
410. I wish you for my wife. I fain would prove
A father to your children: I do think
They love me as a father: I am sure
That I love them as if they were mine own:
And I believe, if you were fast my wife,
415. That after all these sad uncertain years,
We might be still as happy as God grants
To any of his creatures. Think upon it:
For I am well-to-do—no kin, no care,
No burthen, save my care for you and yours
420. And we have known each other all our lives
And I have loved you longer than you know.”

Then answer'd Annie; tenderly she spoke:
“You have been as God's good angel in our house,
God bless you for it, God reward you for it,
425. Philip, with something happier than myself.
Can one love twice? can you be ever loved
As Enoch was? what is it that you ask?”
“I am content” he answer'd “to be loved
A little after Enoch.” “O” she cried,
430. Scared as it were, “dear Philip, wait a while:
If Enoch comes—but Enoch will not come—

Yet wait a year, a year is not so long:
Surely I shall be wiser in a year:
O wait a little!” Philip sadly said
“Annie, as I have waited all my life 435.
I well may wait a little”: “Nay” she cried
“I am bound: you have my promise—in a year
Will you not bide your year as I bide mine?”
And Philip answer'd “I will bide my year.”

Here both were mute, till Philip glancing up 440.
Beheld the dead flame of the fallen day
Pass from the Danish barrow overhead;
Then fearing night and chill for Annie, rose
And sent his voice beneath him through the wood.
Up came the children laden with their spoil; 445.
Then all descended to the port, and there
At Annie's door he paused and gave his hand,
Say gently “Annie, when I spoke to you,
That was your hour of weakness. I was wrong,
I am always bound to you, but you are free.” 450.
Then Annie weeping answer'd “I am bound.”

She spoke; and in one moment as it were,
While yet she went about her household ways,
Ev'n as she dwelt upon his latest words,
That he had loved her longer than she knew, 455.
That autumn into autumn flash'd again,
And there he stood once more before her face,
Claiming her promise. “Is it a year?” she ask'd.
“Yes, if the nuts” he said “be ripe again:

460. Come out and see." But she—she put him off—
So much to look to—such a change—a month—
Give her a month—she knew that she was bound—
A month—no more. Then Philip with his eyes
Full of that lifelong hunger, and his voice
465. Shaking a little like a drunkard's hand,
"Take your own time, Annie, take your own time.
And Annie could have wept for pity of him;
And yet she held him on delayingly
With many a scarce-believable excuse,
470. Trying his truth and his long-sufferance,
Till half-another year had slipt away.

- By this time the lazy gossips of the port,
Abhorrent of a calculation crost,
Began to chafe as at a personal wrong.
475. Some thought that Philip did but trifle with her;
Some that she but held off to draw him on;
And others laugh'd at her and Philip too,
As simple folk that knew not their own minds,
And one, in whom all evil fancies clung
480. Like serpent eggs together, laughingly
Would hint at worse in either. Her own son
Was silent, tho' he often look'd his wish;
But evermore the daughter prest upon her
To wed the man so dear to all of them
485. And lift the household out of poverty;
And Philip's rosy face contracting grew

Careworn and wan; and all these things fell on her
Sharp as reproach.

At last one night it chanced
That Annie could not sleep, but earnestly 490.
Pray'd for a sign "my Enoch is he gone?"
Then compass'd round by the blind wall of night
Brook'd not the expectant terror of her heart,
Started from bed, and struck herself a light,
Then desperately seized the holy Book, 495.
Suddenly set it wide to find a sign,
Suddenly put her finger on the text,
'Under the palm-tree.' That was nothing to her:
No meaning there: she closed the Book and slept:
When lo! her Enoch sitting on a height, 500.
Under a palm-tree, over him the Sun:
'He is gone,' she thought, 'he is happy, he is singing
Hosanna in the highest: yonder shines
The Sun of Righteousness, and these be palms
Whereof the happy people strewing cried 505.
"Hosanna in the highest!"' Here she woke,
Resolved, sent for him and said wildly to him
"There is no reason why we should not wed."
"Then for God's sake," he answer'd, "both our sakes,
So you will wed me, let it be at once." 510.

So these were wed and merrily rang the bells,
Merrily rang the bells and they were wed.
But never merrily beat Annie's heart.
A footstep seem'd to fall beside her path,

515. She knew not whence ; a whisper on her ear,
She knew not what ; nor loved she to be left
Alone at home, nor ventured out alone.
What ail'd her then, that ere she enter'd often
Her hand dwelt lingeringly on the latch,
520. Fearing to enter : Philip thought he knew :
Such doubts and fears were common to her state,
Being with child : but when her child was born,
Then her new child was as herself renew'd,
Then the new mother came about her heart,
525. Then her good Philip was her all-in-all,
And that mysterious instinct wholly died.

- And where was Enoch ? prosperously sail'd
The ship "Good Fortune," tho' at setting forth
The Biscay, roughly ridging eastward, shook
530. And almost overwhelm'd her, yet unvest
She slipt across the summer of the world,
Then after a long tumble about the Cape
And frequent interchange of foul and fair,
She passing thro' the summer world again,
535. The breath of heaven came continually
And sent her sweetly by the golden isles,
Till silent in her oriental haven.

- There Enoch traded for himself, and bought
Quaint monsters for the market of those times,
540. A gilded dragon, also, for the babes.

Less lucky her home-voyage : at first indeed

Thro' many a fair sea-circle, day by day,
Scarce-rocking, her full-busted figure-head
Stared o'er the ripple feathering from her bows :
Then follow'd calms, and then winds variable. 545.
Then baffling, a long course of them ; and last
Storm, such as drove her under moonless heavens
Till hard upon the cry of 'breckers' came
The crash of ruin, and the loss of all
But Enoch and two others. Half the night, 550.
Buoy'd upon floating tackle and broken spars,
These drifted, stranding on an isle at morn
Rich, but the loneliest in a lonely sea.
No want was there of human sustenance,
Soft fruitage, mighty nuts, and nourishing roots ; 555.
Nor save for pity was it hard to take
The helpless life so wild that it was tame.
There in a seaward-gazing mountain-gorge
They built, and thatch'd with leaves of palm, a hut,
Half hut, half native cavern. So the three, 560.
Set in this Eden of all plenteousness,
Dwelt with eternal summer, ill-content.

For one, the youngest, hardly more than boy,
Hurt in that night of sudden ruin and wreck,
Lay lingering out a five-years' death-in-life. 565.
They could not leave him. After he was gone,
The two remaining found a fallen stem ;
And Enoch's comrade, careless of himself,
Fire-hollowing this in Indian fashion, fell

570. Sun-stricken, and that other lived alone.
In those two deaths he read God's warning 'wait.'

The mountain wooded to the peak, the lawns
And winding glades high up like ways to Heaven,
The slender coco's drooping crown of plumes,
575. The lightning flash of insect and of bird,
The lustre of the long convolvuluses
That coil'd around the stately stems, and ran
Ev'n to the limit of the land, the glows
And glories of the broad belt of the world,
580. All these he saw; but what he fain had seen
He could not see, the kindly human face,
Nor ever hear a kindly voice, but heard
The myriad shriek of wheeling ocean-fowl,
The league-long roller thundering on the reef,
585. The moving whisper of huge trees that branch'd
And blossom'd in the zenith, or the sweep
Of some precipitous rivulet to the wave,
As down the shore he ranged, or all day long
Sat often in the seaward-gazing gorge,
590. A shipwreck'd sailor, waiting for a sail:
No sail from day to day, but every day
The sunrise broken into scarlet shafts
Among the palms and ferns and precipices;
The blaze upon the waters to the east;
595. The blaze upon his island overhead;
The blaze upon the waters to the west;
Then the great stars that globed themselves in Heaven,

The hollower-bellowing ocean and again
The scarlet shafts of sunrise--but no sail.

There often as he watch'd or seem'd to watch, 600.
So still, the golden lizard on him paused
A phantom made of many phantoms moved
Before him haunting him, or he himself
Moved haunting people, things and places, known
For in a darker isle beyond the line; 605.
The babes, their babble, Annie, the small house,
The climbing street, the mill, the leafy lanes,
The peacock-yewtree and the lonely Hall.
The horse he drove, the boat he sold, the chill
November dawns and dewy-glooming downs, 610.
The gentle shower, the smell of dying leaves,
And the low moan of leaden-colour'd seas.

Once likewise, in the ringing of his ears,
Tho' faintly, merrily—far and far away—
He heard the pealing of his parish bells; 615.
Then, tho' he knew not wherefore, started up
Shuddering, and when the beautiful hateful isle
Return'd upon him, had not his poor heart
Spoken with That, which being everywhere
Lets none, who speaks with Him, seem all alone, 620.
Surely the man had died of solitude.

Thus over Enoch's early-silvering head
The sunny and rainy seasons came and went

680. Last, as it seem'd, a great mist-blotted light
Flared on him, and he came upon the place.

Then down the long street having slowly stolen,
His heart foreshadowing all calamity,
His eyes upon the stones, he reach'd the home
685. Where Annie lived and loved him, and his babes
In those far off seven happy years were born;
But finding neither light nor murmur there
(A bill of sale gleam'd thro' the drizzle) crept
Still downward thinking 'dead or dead to me!'

690. Down to the pool and narrow wharf he went,
Seeking a tavern which of old he knew,
A front of timber-crost antiquity,
So propt, worm-eaten, ruinously old,
He thought it must have gone! but he was gone
695. Who kept it; and his widow Miriam Lane,
With daily-dwindling profits held the house;
A haunt of brawling seamen once, but now
Still, with yet a bed for wandering men.
There Enoch rested silent many days.

700. But Miriam Lane was good and garrulous,
Nor let him be, but often breaking in,
Told him, with other annals of the port,
Not knowing—Enoch was so brown, so bow'd,
So broken—all the story of his house

His baby's death, her growing poverty, 705.
How Philip put her little ones to school,
And kept them in it, his long wooing her,
Her slow consent, and marriage, and the birth
Of Philip's child: and o'er his countenance
No shadow past, nor motion: any one, 710.
Regarding, well had deem'd he felt the tale
Less than the teller: only when she closed
"Enoch, poor man, was cast away and lost"
He, shaking his gray head pathetically,
Repeated muttering "cast away and lost;" 715.
Again in deeper inward whispers "lost!"

But Enoch yearn'd to see her face again;
"If I might look on her sweet face again
And know that she is happy." So the thought
Haunted and harass'd him, and drove him forth, 720.
At evening when the dull November day
Was growing duller twilight, to the hill.
There he sat down gazing on all below;
There did a thousand memories roll upon him,
Upspeakable for sadness. By and by 725.
The ruddy square of comfortable light,
Far-b'azing from the rear of Philip's house,
Allured him, as the beacon-blaze allures
The bird of passage, till the madly strikes
Against it, and beats out his weary life. 730.

Year after year. His hopes to see his own,
625. And pace the sacred old familiar fields,
Not yet had perish'd, when his lonely doom
Came suddenly to an end. Another ship
(She wanted water) blown by baffling winds,
Like the Good Fortune, from her destined course,
630. Stay'd by this isle, not knowing where she lay:
For since the mate had seen at early dawn
Across a break on the mist-wreathen isle
The silent water slipping from the hills,
They sent a crew that landing burst away
635. In search of stream or fount, and fill'd the shores
With clamour. Downward from his mountain gorge
Stept the long-hair'd long-bearded solitary,
Brown, looking hardly human, strangely clad,
Muttering and mumbling, idiotlike it seem'd,
640. With inarticulate rage, and making signs
They knew not what: and yet he led the way
To where the rivulets of sweet water ran;
And ever as he mingled with the crew,
And heard them talking, his long-bounden tongue
645. Was loosen'd till he made them understand;
Whom when their casks were fill'd they took aboard:
And there the tale he utter'd brokenly
Scarce credited at first but more and more,
Amazed and melted all who listen'd to it:
650. And clothes they gave him and free passage home;
But oft he work'd among the rest and shook
His isolation from him. None of these

Came from his country, or could answer him,
If question'd, aught of what he cared to know.
And dull the voyage was with long delays, 655.
The vessel scarce sea-worthy; but evermore
His fancy fled before the lazy wind
Returning, till beneath a clouded moon
He like a lover down thro' all his blood
Drew in the dewy meadowy morning-breath 660.
Of England, blown across her ghostly wall;
And that same morning officers and men
Levied a kindly tax upon themselves,
Pitying the lonely man, and gave him it:
Then moving up the coast they landed him, 665.
Ev'n in that harbour whence he sail'd before.

There Enoch spoke no word to any one,
But homeward—home—what home? had he a home?
His home, he walk'd. Bright was that afternoon,
Sunny but chill; till drawn thro' either chasm, 670.
Where either haven open'd on the deeps,
Roll'd a sea-haze and whelm'd the world in gray;
Cut off the length of highway on before,
And left but narrow breadth to left and right
Of wither'd holt or tilth or pasturage. 675.
On the nigh-naked tree the robin piped
Disconsolate, and thro' the dripping haze
The dead weight of the dead leaf bore it down:
Thicker the drizzle grew, deeper the gloom;

680. Last, as it seem'd, a great mist-blotted light
Flared on him, and he came upon the place.

Then down the long street having slowly stolen,
His heart foreshadowing all calamity,
His eyes upon the stones, he reach'd the home
685. Where Annie lived and loved him, and his babes
In those far off seven happy years were born;
But finding neither light nor murmur there
(A bill of sale gleam'd thro' the drizzle) crept
Still downward thinking 'dead or dead to me!'

690. Down to the pool and narrow wharf he went,
Seeking a tavern which of old he knew,
A front of timber-crost antiquity,
So propt, worm-eaten, ruinously old,
He thought it must have gone! but he was gone
695. Who kept it; and his widow Miriam Lane,
With daily-dwindling profits held the house;
A haunt of brawling seamen once, but now
Still, with yet a bed for wandering men.
There Enoch rested silent many days.

700. But Miriam Lane was good and garrulous,
Nor let him be, but often breaking in,
Told him, with other annals of the port,
Not knowing—Enoch was so brown, so bow'd,
So broken—all the story of his house

His baby's death, her growing poverty, 705.
How Philip put her little ones to school,
And kept them in it, his long wooing her,
Her slow consent, and marriage, and the birth
Of Philip's child: and o'er his countenance
No shadow past, nor motion: any one, 710.
Regarding, well had deem'd he felt the tale
Less than the teller: only when she closed
"Enoch, poor man, was cast away and lost"
He, shaking his gray head pathetically,
Repeated muttering "cast away and lost;" 715.
Again in deeper inward whispers "lost!"

But Enoch yearn'd to see her face again;
"If I might look on her sweet face again
And know that she is happy." So the thought
Haunted and harass'd him, and drove him forth, 720.
At evening when the dull November day
Was growing duller twilight, to the hill.
There he sat down gazing on all below;
There did a thousand memories roll upon him,
Upspeakable for sandness. By and by 725.
The ruddy square of comfortable light,
Far-b'azing from the rear of Philip's house,
Allured him, as the beacon-blaze allures
The bird of passage, till the madly strikes
Against it, and beats out his weary life. 730.

For Philip's dwelling fronted on the street,
The latest house to landward; but behind,
With one small gate that open'd on the waste,
Flourish'd a little garden square and wall'd:
735. And in it throve an ancient evergreen,
A yewtree, and all round it ran a walk
Of shingle, and a walk divided it:
But Enoch shunn'd the middle walk and stole
Up by the wall, behind the yew; and thence
740. That which he better might have shunn'd, if grief
Like his have worse or better, Enoch saw.

For cups and silver on the burnish'd board
Sparkled and shone; so genial was the hearth.
And on the right hand of the hearth he saw
745. Philip, the slighted suitor of old times,
Stout, rosy, with his babe across his knees;
And o'er her second father stoopt a girl,
A later but a loftier Annie Lee,
Fair-hair'd and tall, and from her lifted hand
750. Dangled a length of ribbon and a ring
To tempt the babe, who rear'd his creasy arms,
Caught at and ever miss'd it, and they laugh'd;
And on the left hand of the hearth he saw
The mother glancing often toward her babe,
755. But turning now and then to speak with him,
Her son, who stood beside her tall and strong,
And saying that which pleased him, for he smiled.

Now when the dead man come to life beheld
His wife his wife no more, and saw the babe
Hers, yet not his, upon the father's knee, 760.
And all the warmth, the peace, the happiness,
And his own children tall and beautiful,
And him, that other, reigning in his place,
Lord of his rights and of his children's love,—
Then, he, tho' Miriam Lane had told him all, 765.
Because things seen are mightier than things heard,
Stagger'd and shook, holding the branch, and fear'd
To send abroad a shrill and terrible cry,
Which in one moment, like the blast of doom,
Would shatter all the happiness of the hearth. 770.

He therefore turning softly like a thief,
Lest the harsh shingle should grate underfoot,
And feeling all along the garden-wall,
Lest he should swoon and tumble and be found,
Crept to the gate, and open'd it, and closed, 775.
As light'y as a sick man's chamber-door,
Behind him, and came out upon the waste.

And there he would have knelt, but that his knees
Were feeble, so that falling prone he dug
His fingers into the wet earth, and pray'd. 780.

“Too hard to bear! why did they take me thence?
O God Almighty, blessed Saviour, Thou

That didst uphold me on my lonely isle,
Uphold me, Father, in my loneliness
785. A little longer! aid me, give me strength
Not to tell her, never to let her know.
Help me not to break in upon her peace.
My children too! must I not speak to these?
They know me not. I should betray myself
790 Never: No father's kiss for me—the girl
So like her mother, and the boy, and son."

There speech and thought and nature fail'd a little,
And he lay tranced; but when he rose and paced
Back toward his solitary home again,
795. All down the long and narrow street he went
Beating it in upon his weary brain,
As tho' it were burthen of a song,
'Not to tell her, never to let her know.'

He was not all unhappy. His resolve
800. Upbore him, and firm faith, and evermore
Prayer from a living source within the will,
And beating up thro' all the bitter world,
Like fountains of sweet water in the sea,
Kept him a living soul. "Th's miller's wife"
805. He said to Miriam "that you spoke about,
Has she no fear that her first husband lives?"
"Ay, ay, poor soul" said Miriam, "fear enough!
If you could tell her you had seen him dead,
Why, that would be her comfort;" and he thought

'After the Lord has call'd me she shall know, 810.
I wait His time,' and Enoch set himself,
Scorning an alms, to work whereby to live.
Almost to all things could he turn his hand.
Cooper he was and carpenter, and wrought
To make the boatmen fishing-nets, or help'd 815.
At lading and unlading the tall barks,
That brought the stinted commerce of those days;
Thus earn'd a scanty living for himself:
Yet since he did but labour for himself,
Work without hope, there was not life in it 820.
Whereby the man could live; and as the year
Roll'd itself round again to meet the day
When Enoch had return'd, a languor came
Upon him, gentle sickness, gradually
Weakening the man, till he could do no more, 825.
But kept the house, his chair, and last his bed.
And Enoch bore his weakness cheerfully.
For sure no gladlier does the stranded wreck
See thro' the gray skirts of a lifting squall
The boat that bears the hope of life approach 830.
To save the life despair'd of, than he saw
Death dawning on him, and the close of all.

For thro' that dawning gleam'd a kindlier hope
On Enoch thinking 'after I am gone,
Then may she learn I lov'd her to the last' 835.
He call'd aloud for Miriam Lane and said
"Woman, I have a secret—only swear,

Before I tell you—swear upon the book
Not to reveal it, till you see me dead.”
840. “Dead,” clamour’d the good woman, “hear him talk!
I warrant, man, that we shall bring you round.”
“Swear” added Enoch sternly “on the book.”
And on the book, half-frighted, Miriam swore.
Then Enoch rolling his gray eyes upon her,
845. “Did you know Enoch Arden of this town?”
“Know him?” she said “I knew him far away.
Ay, ay, I mind him coming down the street;
Held his head high, and cared for no man, he.”
Slowly and sadly Enoch answer’d her;
850. “His head is low, and no man cares for him.
I think I have not three days more to live;
I am the man.” At which the woman gave
A half-incredulous, half-hysterical cry.
“You Arden, you! nay,—sure he was a foot
855. Higher than you be.” Enoch said again
“My God has bow’d me down to what I am;
My grief and solitude have broken me;
Nevertheless, know you that I am he
Who married—but that name has twice been changed—
860. I married her who married Philip Ray.
Sit, listen.” Then he told her of his voyage,
His wreck, his lonely life, his coming back,
His gazing in on Annie, his resolve,
And how he kept it. As the woman heard,
865. Fast flow’d the current of her easy tears,
While in her heart she yearn’d incessantly.

To rush abroad all round the little haven,
Proclaiming Enoch Arden and his woes;
But awed and promise-bounden she forbore,
Saying only “See your bairns before you go! 870.
Eh, let me fetch them, Arden,” and arose
Eager to bring them down, for Enoch hung
A moment on her words, but then replied:

“Woman, disturb me not now at the last,
But let me hold my purpose till I die. 875.
Sit down again; mark me and understand,
While I have power to speak. I charge you now,
When you shall see her, tell her that I died
Blessing her, praying for her, loving her;
Save for the bar between us, loving her 880.
As when she laid her head beside my own.
And tell my daughter Annie, whom I saw
So like her mother, that my latest breath
Was spent in blessing her and praying for her.
And tell my son that I died blessing him. 885.
And say to Philip that I blest him too;
He never meant us any thing but good.
But if my children care to see me dead,
Who hardly knew me living, let them come,
I am their father; but she must not come, 890.
For my dead face would vex her after-life.
And now there is but one of all my blood
Who will embrace me in the world-to-be:

This hair is his: she cut it off and gave it,
 895. And I have borne it with me all these years.
 And thought to bear it with me to my grave;
 But now my mind is changed, for I shall see him,
 My babe in bliss: wherefore when I am gone,
 Take, give her this, for it may comfort her:
 900. It will moreover be a token to her,
 That I am he."

He ceased; and Miriam Lane
 Made such a voluble answer promising all,
 That once again he roll'd his eyes upon her
 Repeating all he wish'd, and once again
 905. She promised.

Then the third night after this,
 While Enoch slumber'd motionless and pale,
 And Miriam watch'd and dozed at intervals,
 There came so loud a calling of the sea,
 910. That all the houses in the haven rang.
 He woke, he rose, he spread his arms abroad
 Crying with a loud voice "A sail! a sail!
 I am saved"; and so fell back and spoke no more.

So past the strong heroic soul away.
 915. And when they buried him the little port
 Had seldom seen a costlier funeral.

1.-5. Long lines' of cli⁷ break'ing have left' a chas'n' と I-
 aubie Pentametre (ニタ綴り宛の脚が五ツあつて、各脚の尻
 に Accent がある詩形)を成してゐるのが、breaking の所だ
 け此の Accent が break されてゐるに注意。即ち文字の意
 味の上ばかりでなく、音響の上からも break してゐる氣持
 を傳へてゐる作者の工夫を看取せねばならぬ。

Chasm (kæzm) の發音に注意。

英語にては海濱の沙を yellow と形容す、我邦にては、白沙、
 青松、など白しと云ふ。

In cluster 「群をなして」

Moulder'd = crumbled 「年古りて壞れた」

5.-10. Climbs to..... = leads up to..... 「上の方.....に達する」

In heaven = in the sky.

Down 海岸の「砂山」 (吾邦にては北陸地方の海岸に多し)

Danish barrows 往昔、Denmark 人、海賊となつて英國の
 沿岸を犯し、英國人と争ふこと多年にして遂に英國人と同化
 したり、其頃の墳墓が塚山となりて砂丘に存し居るなり。

Nutter 西洋にて、栗、椎、などの熟する頃となれば、山林に
 分け入りて果實を探る、殊に榛實は最も喜ばれ、童幼相携へ
 て遊樂し、之を nutting と云ひ、Wordsworth の詩にも此事
 を歌へるものあり。nutter は nutting をする人。

10.-15. Haunted (英、hanted; 米、hānted) 「屢々往く」

Flourishes Green 「緑に茂る」

Damsel (dām'z:l) = girl.

Lad = boy.

Made orphan = 前へ who を補ひて who was made orphan =
 who became orphan 「孤兒となつた」 orphan (ɔ'fn).

15.-20. Play'd (=pl'eɪ) 前の Three children を主格とす。

Cordage 「綱具 (船の)」

Fluke (flūk) 「錨爪」

此の一行は、讀者諸君にも記憶あるべし、海岸にて沙をもて山を築き池を掘りて遊びし幼き頃の實況なれば。

Overflowed 「水に浸された。」

20.-25. Following up (breaker) 「波の後を逐ふ」

Flying.....breaker 「波を避けて逃げる。」

Ran in 「闯入した；くぼみ込んでゐた。」

Keeping house 一家「を持つ」我が少女等の「お客さまごっこ」の如き遊び。

列：— { Do you keep house?—No, I live with my uncle.
家を持つて居るかい。イヤ叔父の家に居る。

類例：— { He keeps shop on the Ginza.
銀座通に店を出して居る。

Host (hōst) 「亭主(饗應の席上にて)」之と對して、**guest** 「賓客」なる詞を學ぶべし。

25.-30. Still=always

Mistress (mis'tres) 「女房(客に對する女主人)」ost に對しては hostess といふが常。此詞は往々惡き意に取られる故、*Your mistress* など云はぬがよし。

At times = occasionally 「時たま」

Hold possession of.....「.....を占有する」

Turn and turn about=by turns 「ガル々々と；順番に」

30.-35. Made=built 「體格」邦語にても「頑丈作り」と云ふを参考せよ。

Was master 「我意を押し通した」勝つた」

Wrath (rath or rāth) 「憤怒」

At this=at hearing this.

For company 「お附合に」、「釣り込まれて」

35.-40. Pray them not to quarrel は前行の would と聯結

して「喧嘩をしないで呉れといふを常とした would)」意。

For her sake 「自分のために」

Rosy childhood 「色鮮かな(=花のやうな)幼年時代」小學時代が人生最大の幸福時期であることは誰人も御承知なるべし。

New warmth =love.

Fixed his heart on—「心を——にとめる」=「一心に——を思ひ込む」

But Philip loved in silence 「されどフネリツブは啼かぬ螢の身を焦す思ひをした」

40.-45. Unto=to

Tho=though

Deny it=she would say, "No, I am not in love with him."

Before his eyes=in view 「前途に」

Hoard (hōd) 「積貯へる」

45.-50. To the uttermost 「力の及ぶ限り」

purchase は日本人の Accent を誤り易い語である、purchase と前を強く。

Prospered=succeeded.

A carefuller (fisherman in peril = A fisherman more careful in peril 「危険に臨んでこれほど用意周到なる漁夫」

Breathe (brēth)=live.

Leagues (lēgz) one league=3 miles

50.-55. Likewise=also

Served 「勤務した」

Merchantman 「商船」比較：—A man-of-war 「軍艦」尙、man を「船」の意に用ふることを：—An Indiaman 「印度通ひの船」の如き例にて記憶せよ。

Made himself...sailor=became...sailor 「.....の水夫となつた」但し、make oneself の形に、努力して鍛へ上る心持あり。

Plucked 「拾つた」、「曳き上げた」。

55.-60. **Sweep**=rapid current.

Looked upon him favourably=regard'ed him with good will. 「好意を以つて彼を見た」。

Ere=before.

May 「五月」。譯文を「四月末」としたるは、五月になる前 (ere) とある故なり。

Nestlike 「巢のやうな(温い心地よい)」。

60.-65. **Golden** 「金色の」。木の實、禾穀の實れる形容。

Eventide=toward evening 「夕刻」。

The younger 此比較級は大勢を二大別する時に用ふ。

類例:—*The younger students are better scholars than the older ones.* (若い方の生徒が年老つた方の生徒よりよく出来る)。

Making holiday 「休業して」。

類例:—*Let us have a holiday to-day.* (今日は休みにしよう)。

The park is crowded with *holiday-makers*. 「その公園は遊山の人々で一杯であつた」。

With bag and sack and basket, great and small の一行は如何にも人さまさまの出立が目に見えるやうな音調である。great and small は「人々皆々」の意。

Went nutting 「果を拾ひに行つた」。

類例:—*He went out* { hunting. 獵に行つた。
fishing. 釣に行つた。
boating. 船遊山に行つた。

Stayed 此語は一行隔てた下の an hour behind へかかり、*stayed behind* となる。

65.-70. **Lying**.....**needing** 此 present participle は下の如く改

むるを得べし、(但し詩としてに非ず單に文意を取る便宜上)

As his father lay sick and needed in

As.....=while..... 「.....する折柄」。

Just where=just at the point where

Prone 「傾斜せる」。

The edge of the wood 「森の端; 裾」。

Feather 傾斜をなせるところの林樹の頭が、鳥の羽毛のぎざぎざに重なるに似たるよりかく形容せるならむ。

Hand-in-hand 「手に手を取つて」。

類例:—*The two were seen walking arm in arm.*
その二人は腕を組んで歩いて居た。

70.-75. **Gray eyes** 日本語に寫して「灰色なる眼」など云へば變に聞ふるれば譯せず。

Weather-beaten 「風雨に曝された」。

All-kindled 「スツカリ照り輝いて居る」。此 all は「總て」に非ず、「スツカリ」と度合を示す。

Fire 純潔なる戀愛の「情火」。 **That.....on an altar.** 昔、神に捧ぐる犠牲を「祭壇上にて焚きたる火」。

Read=saw 「覺つた」。

Doom 「運命」此處にては、自分の戀の叶はぬこと。

Drew together (to kiss).

Slipt slip 「そつと歩く」の過去。

75. 80. **A wounded life**=A wounded creature. 假に「鹿」と譯せり。此 wound と云ふ文字は *My pride is wounded.* の如く、口惜い心持あれば今、life を Philip の生涯と見て叶はぬ戀に「あたら一生を臺無しにして」の意に取るも可ならんか。

The rest (of the holiday-makers)

Had his dark hour=sank in melancholy 「悲哀に沈んだ」。

Unseen=avoiding others 「人目を避けて」。

Past=passed; went away.

Bearing a.....hunger 「心に生涯慮されぬ空乏を感じて」。

80.-85. Were wed=_o. married.

The bells 西洋にては結婚の式を教會にて擧ぐる故、祝の鐘を鳴らすなり。此行と下の行との原文を反覆誦讀して、音調の妙を味ひ給へ。如何にも楽しい鐘の音と、楽しい年月の流るゝさまが耳にひびきませう。

Ran=_passed 「経過した」。

Competence 「不自由のない生活」。

Honourable 「正しい」。

First son (being) a daughter.

In him awoke 此 awoke の主格は下行の the noble wish なり。

To save 前の wish の apposition なり。

85.-90. Earnings 「稼ぎ高」。

To the uttermost 「出来る限り」「精一杯」。

Bringing-up=_education 「訓育」。

His (= Enoch's bringing up).

A wish (which was) renewed 「その望たるや又新たにされた」。

Came a boy to be=_a boy was born and became

Rosy 「薔薇色の」。

idol 「寵愛物」。

Was abroad=_was away from home

90.-95. Landward 濱より「内地の方」。

In truth 「まづたくのところ」。

Spoil=_game 「獲物」。

Osier (o'zher) 「楊の一種」。

The market-cross 「市場」昔は市の立つ場所へ十字形の標

木を建てたるより由來せる語。

95.-100. But=but also

Far as.....=_were known as far as.....

Portal-warding 「門を衛る」此處にては門に附けた紋章なり。

Lion-whelp 「獅子の仔」。

Peacock-yewtree 「孔雀の形に刈り込みし水松樹」。

The lonely Hall 一軒家の心持、茲では他の小作人の cottages とかけ離れた庄屋の邸を指す。

hall といふ語は普通の家では玄關の室(來客が帽子や外套を置く設備や二階へ參る階段などある室)を指し、又は廊下を意味し、又は大廣間を示す。

Whose 前の Hall を受く、無生物にても此場合の Hall は「邸(の人々)」の氣持なれば whose にて繋ぎてよし。

Fridayfare 羅馬教の信者は金曜日を基督磔殺の忌日なればとて、獸の肉を食せず、魚を食ふ。

100. 105. Ministering=_serving=furnishing 「供給する」。

All things human 此 human は things を形容す。

The narrow port Enoch の住める港を指す。

Haven (hā'vn) 「港灣」。

Thither=(to) there

Used 次の行の to go へかゝる。

Go by land 「陸から行く」。

例:— { I'll go as far as Kobe by land, and then by water.
(神戸迄は陸を行つてそれから水路を取りませう)。

105.-110. When he was there

By mischance=_by accident 「過つて」。

Slipt 「巾心を失つた」。

A limb=_a leg, or an arm.

Recovering 「恢復しつゝ」前の lay の Complement

Bore him 「彼に産んでやつた」。

Another hand = another man.

110. **115. Crept across his trade** 「商賣の邪覺に入つた」。

Theirs = the children's bread

On him fell 此 fall の主格は下の doubt and gloom なり。

Altho' = although

Inactive 「身體が利かずに」。

He seem'd (= seemed) は次行の To see へかかる。

Nightmare 「恐ろしい夢」大蛇や鬼に逐はれて遊場のないやうな心地。又、「一種の怪物」にして夢に人を脅すものと解すべき場合あり。

115.-120. **Leading** 次行の lives にかゝる。日本語にて「愉快な月日を送る」は He is *leading* a happy life. と英譯して可。

Of hand to mouth 前の leading evermore.....lives を形容し、「其日暮しの生活」の意を示す。下の句を参照せよ。

{ Most of the villagers live *from hand to mouth*.

{ (村人の多数は其日暮しだ)。

from hand to mouth とは、手で稼ぎ得た金を直ぐに口へ持ち込む、即ち、將來の貯への出来ぬ貧乏生活。

Her, he loved = her whom he loved 即ち、アノイを指す此句は前の To see にかゝりて

And he seemed to see her a beggar となるなり。

Whatever comes to me 「我身には何事も起るとも」。

120.-125. **Enoch had served in** = in which Enoch served 茲に had を用ひて「これより前」の意を示せしに注意せよ。

Mischance = ill luck 「不幸」。

The man = The character of Enoch 「イノツクの人物」此 the

は人の性格を示すものにして普通の冠詞より意重し。

Reporting 前の Came へかかる。この一行を paraphrase して And reported that his vessel was bound for China. とせば解し易かるべし。

Boatswain (bō'sn) と發音する事多し) 船長の下にありて、水夫等を監督し、綱具帆などを掌る職、「水夫長」にてよかるべきか。

Would he go? 船主は "Will you go?" と問ひたるなり。

Would Enoch have the place? 船主は Enoch に向ひて、"Will you have the place?" 云ひ換ふれば "Will you accept the post?" と問ひしなり。

Answer 「應驗」。此場合、「返答」と譯す勿れ。

Shadow of mischance 「不幸の陰」不幸の爲に心痛、杞憂に胸鎖さるゝを shadow と形容せしなり。

No graver than..... 「.....に等しく瑣細なる」。下の例を参考すべし。

{ I am *no better than* yesterday.

{ 昨日と相變らず悪い。

As when..... = as it would be grave when.....

Little cloud cuts off..... the offing 讀者今海原に面して立てるものと思ひ、さて、「海面を眞向に照らす日光が雲の爲めに遮られて觀る人々の立つ邊りは暗く陰となれるが、遙かの沖は日光雲に遮られずして海上を照らすさま、此方も他の海面も暗きに、雲間洩る日光の照す所だけあか々と輝く故、宛然島の浮き出でたる感あり」との意。此の譬は Terns 自身には極めて明白なる印象を起したるに相違なけれど一般讀者には、其光景を想起すること困難なり。上に掲げし小生の解釋は海岸にて實見せし所に係る。

Isles 「島のやうにする」。動詞なり、注意すべし。

In the offing 「沖に」。

Yet the wife when he was gone his children what to do? 此構造に無限の妙味あり。今迄は前途の希望に元氣旺なりしも、フと思ひ返せば、「我妻は如何に」と勇氣挫げ「我れ行きし曉には」と一考し、「さて又子供等は」と胸重く「どうするだらう」と悩む、語句途切れ々々の間に含む人情の美、讀者願くは其味を汲み給へ。

Lay long-pondering on his plans 「寝ながらつづく自分の計畫を熟考して」。

参考:— You had better *sleep on* the subject.
その問題は(今直ぐに考へず)寝て考へる。

「六ヶしい仕事などは大要を頭に入れて置いて寝ると二三日経つと旨い考が出る」とは某著述家の談話なり。

A rough sea 「荒浪」。

Weathered 海上に用ふれば「風濤を冒して航する」意。

Horseman 「馬へ乗る人」、又は「馬を扱ふ者」茲にては前者と解すべし。

With what she brought = with the money the boat brought
= With the money he got for the boat 「船を賣つた金」。

Set.....forth..... = establish..... 「.....其後押をして——を始めさせる」。

Keep the house 「今の家を其儘支へて行く」。

140.-145. **Should he not.....?** 「.....して悪いか=悪い筈はない=してよい譯だ」。

Trade himself = trade on his own account 「自分勘定で商をする」。

Out yonder 「彼方=彼地」 out は海外の意にて附す。

Go This.....oace? 「此航海を一度ならず行くかつて」と自問して、

Yea twice or thrice 「ア、行くとも二度でも三度でも」としたるなり。

Returning rich 「金持になつて戻つて」 参考:—
He went to America poor, but returned rich.

145.-150. **Among his own** = among his own children

Sickly 「病身の」 區別:—sick は「病氣の」又は「胸わるき」。

150.-155. **Her latest born** 「最近に彼女から生れた者」。

Appraised 「手加減で量る」。

Fondled 「可愛がつてなでる」。

155.-160. **Had no heart** = had no courage 「勇氣がなかつた」。

Enoch's golden ring 婚禮の時 Enoch が Annie に贈りし指環。即ち wedding ring なり。

Brawling = noisy, quarrelsome

160.-165. **Manifold** 「あまたたびの」。

Entreaties 「懇願」。

Sad kiss kiss をするも心哀しく涙ながらに kiss して思ひ止まりてよと搔き口説く、優しき妻の情察すべし。

sure that..... = I am sure that..... 「.....なるは必定」()
の中は妻の言葉を表はす。

Come out of it (= your voyage) 「その航海から生ずる」。

Supplicating 「懇願しつゝ」。

Cared for her 「妻の事を大事に思(つたら)」。

Not to go 前の supplicating の目的格。

165.-170. **Let her plead in vain** 「妻の願を無効にした」=「妻の詞を聞きながした」。

Grieving 妻の嘆願に「心痛みつゝも」。

Held his will 「自分の意地を張つた」。

Bore it thro (= through) 「意地を立て通す」此句は普通の熟語なり。

“For 此 for は前に “held his will, and bore it through” とある意を受けて「果してその意志を徹して」これ即ち For used in justification of the previous statement. の一例なり。

Parted with..... 「.....を手離す」「割愛する」惜しいものに云ふ。

Old sea-friend=his boat 尙此 old は「長い馴染の」にして「古ぼけた」意に非ず。即ち ~~part~~

Set his hand (To.....)「.....に着手した」注意 To set one's hand to.....=To sign=「記名する」と云ふ熟語もあり。

170.—175. Fit.....with.....=equip.....with—「.....へ.....を具へる」supply, furnish などと同類の構造。

Corner 商品などを据える「隅」。

Enoch's last=the last day Enoch stayed at home.

streetward sitting room = the sitting room facing the street 「街路に面した居間」。

pretty cabin 「小綺麗な家」此場合は cabin = little house

此邊は

主 格
hammer and axe, Auger and saw

動 詞
.....shrilled and rang, Shrilled and rang の adverbial phrase
Shaking their pretty cabin

として見れば主格賓詞の関係明瞭なり。

175.—180. Hear her on death-scaffold raising 「自分の首切臺が建てられて居るのを聞く」 scaffold は「断頭臺」日本の「獄門臺」とは異なれど、適譯思ひ付かぬまいか自由譯せり。

Raising=being raised 「樹てられつゝある」。

Till 前の rang から續く故、till at last として解すべし。

Order'd = arranged.

Seedling = seed 此邊の意は、「自然の妙用は繊細なる梢や草

の莖にも、美しく調和せる花や實を具ふるが如く、狭き場所へよくチンマリと商品が配置された」と云ふなり。

Paused 前の careful hand に屬する動詞。

180.—185. needs = of necessity 「どうしても」。

To the last = as long as he can 「どこまでも」此一行の意は「イノクは自分の時間、勞力の續く限りはアニの爲めに働くを禁ずる能はざるなり」と云ふなり。即ち、明日出立の今日迄、勞れ切る迄働いたことは事實なり。尙、此場合の needs would.....は could not but..... として見るべし。

Ascending = going upstairs 注意 西洋にては寢室に概して階上にあり、故に譯文の如き意となる。

Faced 「勇ましく之に對す」。

例：— (a) Luther boldly faced his enemies.
(b) You had better face the consequences bravely.

(a) は實際「顔を向ける」意、(b) は抽象的にして「屈せずに事に當る」意。

All his Annie's fears, save, as his Annie's, were a laughter to him.

=All fears Annie entertained were a laughter to Enoch except that those fears were his dear Annie's.

Enoch would have laughed at all fears of Annie but for their being his dear Annie's fears.

=「あらゆるアニの心配をイノクは一笑に附し去つたが唯その心配が他人ならぬ可愛のアニの心配であると云ふ一點丈は一笑には附しなかつた」。

185.—190. Brave God-fearing man 「勇氣ありて神を畏る、人」と直譯すると變なれど God-fearing = pious = reverencing and obeying God = 「敬虔なる」と解すれば brave と兩立する事當然なり。

原來、brave と云ふ字義は暴虎馮河の勇に非ず、信仰、自信等より生ずる眞正の勇まじさを云ふなり。彼の Cromwell の軍家は勇猛無比と稱せられしもの、しかも彼等が神の前に膝づく時は戦慄叩頭して自己の罪過を謝する様殆むど別人の感ありしと云ふ、Macaulay はその Milton 論に下の言をなせり。Thus the Puritan was made up of two different men, the one all self-abasement, penitence, gratitude, passion; the other proud, calm, inflexible, sagacious. *He prostrated himself in the dust before his maker but he set his foot on the neck of his king.*

God-in-man man-in-God 「神人合一」 「神と人の交通」。

God-in-man = divine quality in man 「人の神性」。

Is one with..... is united with.....

Man-in-God = humanity in God 「神の人性」。

In that mystery 篤信なる基督教徒が祈禱を捧ぐる時は、一種の靈感起りて我れ神に行くか神我れに降るか、所謂見神の境に入る。これを mystery といへるなり。

190.—195. By the grace of God 「天祐により」。

Grace = favour.

Fair weather = prosperity 「幸運」 船頭の詞には相應の譬ならずや。

Keep a clean hearth for me = have everything in order against my return 「家内を清めて我歸るを待て」 爐を潔め、火を明々と燃すは人の來るを待つ準備なり。尙、hearth は、「家庭」の意に用ゐらるゝ事多し。

I'll be back before you know it 「お前の知らぬ内に戻つて來る」此詞が識をなせること後に分明す。

My girl Annie を呼ぶ、親しき詞。

Puny 嬰兒に附する形容詞にして、「いたいけなる」。

195.—200. Love him all the better for it 「弱いから却つて倍々可愛がる」。

比較 { I have got *none the better* for his treatment.
 { あの人^の療治を受けてもちつともよくならぬ。
 { I have got *all the better* for my hard study.
 { 勉強したら却つてよくなつた。

It = that he is weakly

Nay 前に puny, weakly など輕んじだ詞を用ゐたので、それを打消して、「イヤ」と云へるなり。

Foreign parts = foreign countries

200.—205. Come 「サア」と勵ます詞。

Cheer up 「元氣を出せ」。

Running on = talking away 「酒々と辯じつゞける」。

She heard を此行の冒頭へ出して見れば明瞭となる。

almost hoped herself = she *also* inclined to hope 「アニ自身も希望が生じた」。

Turn'd the current of his talk 「話頭を轉じて」。

Roughly sermonizing = preaching homelily 「通俗に神の道を説いて」。

205.—210. Providence 「天の攝理」。

She, heard, Heard and not heard him アニは真人の音聲は聞ゆれど何を云ひつゝあるや心弦に在らざれば毫も解する能はず、所謂「心弦にあらざれば聞け共聞えず」。

Musing on him that used to fill it for her = thinking of her lover who used to fill the pitcher for her. 「よくあの方は私に水を汲んで呉れたつけ」と舊時を追憶して水を汲んで居るのを忘れる意。

Hears overflow 水の音を聞きながら茫然として水指の

溢るゝを知らず。

此邊の形容頗る詩的なり、山川の笈の水などを汲む時水の落る下へ手桶を置いて待つて居る時にはいろいろの考浮ぶものなり。

210.-215. **For a'l your wisdom** = in spite of your wisdom 「貴夫は賢からうが、それでも」

I shall look upon your face no more 此詞は後にて思ひ合さる。

The ship I sail in = the ship in which I sail

215.-220. **Get you** 「.....を持って来い」此 you は略して可なり。Bible の英語には命令法の後に皆二人稱を措く、例へば *But seek ye first the kingdom of Heaven and his righteousness and all these things shall be added unto you.*

A seaman's glass 「船人の用ふる強力の望遠鏡」

The last of those last moments 「いふ々々お別れの時」

Be comforted = cheer up. 「元氣を出せ」

Look to = give heed to = take care of 「.....を世話する」

220.-225. **Shipshape** = neat and tidy as things are kept on board a ship 「船中のやうに(キチンと)」

Cast all cares on God 「總ての心配を神に委れよ」新約聖書、彼得前書第五章の七節に “*Casting all your care upon him; for he careth for you.*” 同邦譯に「爾曹その憂慮ふところを悉く神に委ぬべし、蓋はかれ爾曹を顧み給へばなり」とあり。

That anchor holds 前に **Cast** と云ひしより錨に譬へて、「神に頼む錨は外れはせじ」、「其信頼は無効に歸することなし」

Holds 錨などの「シツカリとかいる」

Is He not.....Parts.....morning?

= Is there no God out in those remote Eastern countries? (Of course He is there, too.)

He = God

Parts of the morning = the East

225.-230. **The sea is his: He made it** 此句は舊約聖書、詩篇九十五章、五節にあり、「海は神のもの、その造り給ふところ、早ける地も亦その御手にて造り給へり」

Enoch rose これ迄諄々と信仰の必要を説き來たりて、茲にいふ々々出立せんと「起ち上りし」なり、斯の如く言動が頓に變化する時此の如くボツリと短き clause を用ふる事往々あり。尙、此句は前の行と合して一行を作すに注意せよ。

Cast his strong arms about = embraced with his strong arms 「逞しい腕で.....抱き締めた」英米人は夫婦が遠き旅に出づる時などは相抱擁して別を告ぐる事普通なり、日本人より見ればイヤらしく思はるれど然らず。尙、strong arms と云ひしにて、イノリが逞しい壯漢なることを示し、(此屈強の壯夫にして尙、かく迄に情に篤し)との意籠りて床し。

Kiss'd 「.....を接吻した」キツスして別を告るなり。眠る時にも母親が kiss してやる、何だ彼だとして子供には kiss をする、邦語に譯しては妙に聞ゆる故意譯したり。

Wonder-stricken 「驚異の念に打たれた(平常とは異つた此場の光景に)」

230.-235. **But for** = *But as for* 「併し.....は」此場合には *But for* が「.....なかりせば」の意に非ず。

A night of feverous wakefulness 「一晩晩熱の爲めに睡られずウツラ々々して居た」

類例:—

After a night of snowfall, we find the streets a veritable quagmire.

尙、feverous は今多く用ゐず、feverish を普通とす。

Would have raised him (, if Enoch had not stopped her) と補びて譯文の意を生ずるを知るべし。

how should the child remember this? = how can he possibly remember my bidding him good-bye? = it is impossible that he should remember this parting 「どうして今の別を覚えて居ようか = 覚えては居まい」。

Cot 「輕便寢臺」我邦の床几の如く折疊自在なる打交ひの脚へ布を張りたるもの多し。

235.—240. Forehead (fôr'id) 「前額」。

Clipt clip 「剪る」の過去形。

Curl 「一トふさの髪」少女の巻きぢられたる毛にて可愛らしき意あり。かく髪を遺愛とすることは西洋には普通にして愛人の髪を時計の鎖に附けたる飾の中に秘め置く人などあり。

Thro' = Through.

Bundle 「旅の調度の一ト包」。

Waved his hand 「手を振つて(別れを告げ)た」。

Went his way = departed 「出發した」此句には「出發する」意の他に尙二つの重なる用法あり。

(1) 歩いて居たものが一旦立停つて復た自分の行程に就く意。
例:—The policeman, having shown me the way, went his way.

(2) 自分の勝手にさせる意。
例:—If he will not listen to our advice, let him go his way.

She.....came 此行の措字を轉置して when.....came, she とす

れば解し易し。

240.—245. Borrow'd.....but all in vain 「.....を借りたが、何の效もなかつた」。

Fix the glass to suit her eye 「その望遠鏡を自分の視力に適はす」双眼鏡を視力の強弱によりて伸縮すること諸君の熟知せらるゝことならん。

Stood on deck waving 「(手巾か帽子を)振りながら甲板に起つて居た」ア=イが双眼鏡で自分を眺め居ることと思つて合圖したるなり。

The moment and the vessel past = both the brief opportunity of seeing Enoch (=the moment) and the vessel passed away 「イノクを見る機会も過ぎたし、又た、船も通り過ぎた」。

注意 past は the moment にも the vessel にもかゝる。

Ev'n = Even.

245.—250. The last dip..... 「.....のイヨ々々これを最後の影が見えなくなる」 dip は此場合、帆が水平線下に没することを示す。

Vanishing sail 「影がうすれて見えなくなる帆」。

Weeping for him 「良人を慕ふて泣きながら」。

Tho' = though

Mourned.....as his grave = mourned.....as if he had died

Set her sad will no less to chime with his = in spite of her sorrow, conformed herself to the will of Enoch 「心中は哀に満つれど良人の意志に従つて(店商ひに従事し)た」。

注意 No less = none the less for her grief 「悲めばとてそれが爲めに度合を減ぜず = 悲しいにも係はらず (notwithstanding her sorrow)。

Chime with..... = agree with..... 「.....と一致する」。

Throve not=did not thrive 「旨く行かなかつた」。

250.-255. Not being bred to barter=as she was not trained to business 「商業上の教育を受けなかつたので」。

類例:--- { He has been bred a tailor.
彼の男は洋服屋へ年習を入れたんだ。

注意 本文の barter は名詞なり。

Compensating the want By..... 「其缺點(商人としての教養のないこと)を.....で埋め合せる」。

Shrewdness 「敏活」の意より寧ろ、「狡猾」「素ッばどい」。

Neither capable of lies = and she could not tell lies in order to sell worthless articles at a good price

Asking overmuch and taking less 「法外の價格を吹掛けて實は廉く賣る」。

類例:---

{ They sometimes overcharge us at the shop.
あそこの店ちや時々ホルことがある。

Foreboding..... 「.....だらうと豫想して心配する」。

例:--- { The clouds forebode rain.
あの雲ちや雨らしいナ。

For forebod: する「理由は」。

In days of difficulty 「困難した場合に」。

255.-260. Pressure=urgent needs. 「差迫つた必要」。

Wares=stores of goods.

For less Than what she gave in buying what she sold=at a lower price than the cost price 「原價よりも安値で」。

注意 **What she gave in buying** 「買ふ時に出した値段」=「原價」=the cost price.

What she sold 「賣つた商品」。

And saddened knowing it=and she felt very sorry when she was aware that she failed (=it) 「失敗したナと思ふと一層元氣が落ちた」。

Expectant of..... 「.....を待ち望んで」。

The news which never came 「(待てども)遂に來らざりし音信を」。

Her own=her children

260.-265. Cared for it with all a mother's care 「サスガ母親の情であらゆる心ばせを盡して世話をした」。

Thro' the want of what it needed most 「その赤ン坊(it)が一番必要なもの(ナニカ食料か藥)の缺乏した爲め(thro'=through)」。

Means to pay=money to pay.

265.-270. The voice who best could tell..... = the man who knew best.....=the doctor 「醫者」。

Howsoe'er it was=however it might have been 「それほどちらにもせよ」。

A lingering 抄々しく癒りもせず「愚圖々々した病氣」を云ふ。

Ere she was aware=before she knew 「アニイが知らぬ間に」、「いつしか」。

Like the caged bird.....

270.-275. The little innocent soul flitted away.

上の二行は Tennyson の叙景の筆の巧妙なる好適例なり。殊に最後の行の cadence は實に巧みなるを覺ゆ。

Hungered for.....=longed for..... 「.....を熱望する」。

例:---Blessed are they which do hunger and thirst after righteousness; for they shall be filled 「饑え渴く如く義を慕ふも

のは幸なり、その人は飽くことを得べければなり」—馬太傳
五章の六節。

Peace 「無事平安(音に身體の上のみならず心に於いても)」。

Smote *smite* 「打つ」の過去。邦語にて後悔齎を嚙むなど云ふ
ことあり、それと詞は異なるも、悔恨の念に「心の痛む」を云
ふ意は同じ。前の heart の動詞。

275.—280. **May be**.....前の / へかゝる。

Solitary 「寂として人の影もない」。

.....**Room in front** 「前方の室」。

Inner door 店から更に奥の間へ入る口の戸。

Struck it = *knocked at it* 「戸を叩いた」西洋にては假令一家
族にても他の者の居間へ入る時は外にてコツ々々と戸を叩い
て申より “Come in” と許諾を得るを禮とするなり。

No one opening = *as no one opened the door to receive him*
「誰れも開けて迎へなかつたので」。

280.—285. **Seated with her grief** = *seated with no other com-
panion except her grief* 「悲嘆の他に友もなく = 悲嘆に沈ん
で」。

Fresh from..... 「.....を済したばかりの」。

Cared not to..... = *Didn't like to*.....

285.—290. **The passion in her moan'd reply** = *the bitter
feeling expressed in her moaned reply* = *the resentment ex-
pressed strongly in her reply* = 「アニイが悲痛な聲音で答へ
た詞の剣のある語調」。

Favour from..... **As I am!** = *What favour can you expect
from.....as I am?* = *How can you ask a favour of.....am?*

Abashed him 折角云ひ出さうとした「氣先が挫かれた(快く
迎へられなかつた爲)」。

Yet unasked = *nevertheless, though he was not asked* = *though*

he was *not welcomed* 「快くは迎へられなかつたが」。

Set himself = *seated himself* = *sat*

290.—295. **Enoch, your husband** 前行の *he* と同格。

Ever = *always* 「日頃」。注意 *ever* は「曾つて」の意味にては
肯定文に用ゐられず

比較:—

問 { 日光へ(曾つて)行つたことがあるか。
Did you *ever* visit Nikko?

翻 { ア、(曾つて)行つたことがあるよ。
Yes, I have *ever* been there.—誤
Yes, I have *once* been there.—正

Where he fixt his heart = *what he determined to do*

Set his hand = *set to work* 「着手した」。

Will'd = *was determined*

295.—300. **Bore it through** = *persevered till it was done*

Wherefore = *for what* 「何を目的で」。

Nay = *far from it* 「とんでもない」。

For the wherewithal = *to obtain the means* 「資金を得んが
爲め」。wherewithal は「金錢」の意に用ゆ。

300.—305. **His** = *his bringing-up*

Vext will he be = *he will be vexed*

The precious morning hours = *precious time of child-
hood* 「貴重なる幼年時代」。人生を一日に譬へて年少の期間
を「朝」と見たるなり。

305.—310. **Running wild like colts**..... 「仔馬が荒野を駆け
回るが如く、禮義も教育もなく駆けずり回つて居る」。

Have we not known.....? = *We have been friends since
our childhood, have we not?* 「幼友達ちやなかつたか」。

I do beseech you by the love you bear Him.....**not**

to say me nay = I beseech you *not to refuse me, if you love your husband and your children.* 此の如き *by the love*は、「.....の愛情は強いが、その愛情によつて」「後生お願ひだから」の意。

310.-315. If you will = if you desire to do so

With her brows against the wall = leaning her brows against the wall 「額を壁に凭せて」壁に額を向けしは深き哀痛を表はす。

315.-320. Look you in the face 「憚る處なく顔を見る」

比較:—

{ He can look all the world in the face.

{ 彼は世間に誰一人憚るものはない。

{ I can not look you in the face.

{ (申譯がなく)君の顔が見られぬ=君に合はず顔がない。

Broken down (by sorrow) 「悲哀の爲めに心くづおれた」

Your kindness breaks me down = I *am overwhelmed by your kindness.* 「餘りの御親切に胸もせまる」

230.-325. That it borne in on me = I *have an inward pre-sentiment that it is so* 「どうもさうだと胸の内に暗示がある」

Not kindness such as yours = but such kindness as yours *can not be repaid*

You will let me? = You will *allow me to put your children to school, won't you?*

325.-330. Swimming eyes = eyes that were swimming in flowing tears

Dwelt.....on.....face = *looked closely.....upon.....face.*

Calling down a blessing on his head = saying, "God bless him!" 英語にて最も熱切なる感謝の意を示すに、I thank you. と云ふかほりに、"God bless you!" と云ふ。

Caught at..... 「.....を握つた」此の構造に「矢庭に.....に縋りつく」氣持あり。類例:—A drowning man will *catch at a straw.* (溺るゝ者は藁にも縋る)。

330.-335. Does his duty by his own = discharges his duty *towards his own children by=towards*

made himself theirs = *devote himself to thir care*

335.-340. The lazy gosship 「根も葉もなき浮いた噂」

Denied his heart his dearest wish = did not gratify the dearest wish which his heart longed to realize 「自分の心で無上に希望して居ること、(即ち、アニを訪問すること)、を自ら抑制した」

Cost her threshold = *visited her*

By the children 「子供に託して」

Garden-herbs = vegetables 自分の島で出来た野菜物。

Fruit 集合名詞にして単数形なれど複数之意。

Late and early..... 「これは早咲きぢや」とて贈り、又「これは晩咲きぢや」とて贈ると云ふ意。

340.-345. Conies = rabbits

With some pretext of fineness in the meal 「粉が細かく出来たから差上げるなど、旨い口實を設けて」これは下の

to save the offence of charitable 「慈善的に施すと云へば貰ふ方で厭やな氣持がするからそれを避ける (save) 爲めに云ふなり。此の一句にても Philip が如何程親切なる人物か了解せらるべし。

Mill that whistled..... 此 mill は「風車」なり。風車を用ひて動力とすること西洋には頗る多し。

Fathom = comprehend 「了解する」もと底水の深さを意味し、動詞としては測量する意なれば「人の底意を測り知る」

345.-350. Scarce could the woman when he came upon her,

Out of full heart and boundless gratitude

Light on a broken word to thank him with

以上三行を下の如く paraphrase して見るべし:

Annie (=the woman) could scarcely find (=light on, even a broken word with which to thank Philip, when he came upon her, because she felt her heart so full of gratitude that she could not speak.

Out of.....=because of.....=owing to..... 「.....の爲めに」此句は motive を示す事多し、例:—Out of kindness I warn you against him. (親切氣から私は君に彼男のことを警告するのだ)。

Light on=meet with=think of 「出ツ會はず=思ひ付く」。

All-in-all=everything 「あらゆるもの=天にも地にもフ井リプがあれば他のものはいらぬ=何より大事な人」例:—She is all-in-all to him. (彼にはその女が天にも地にも替へ難い)。

350.-355. Greet his hearty welcome heartily=meet Philip gladly, who also extended to them his hearty welcome 「心からの歓迎に心から答へる=互に心底から親睦する」。

Lords of his house 「彼の家の天下様=彼の家で何事も勝手に振舞ふ」。

Were they は they were として冒頭へ出して見よ。

Worried his passive ear=worried him, who listened to them passively 「受身の彼の耳を煩はす=黙つて聞いて居る彼を困らせる」。

Petty wrongs 「些かの損害」。

のボチがいけないよ、など云ふ類。

355.-360. Philip gained as Enoch lost (their affection)

「イノツクが兒等の愛情を失つて行くに連れて (as) 一方は、フ井リツプが愛情を獲た」。

Vision 「幻像」。

Avenue 「並木路」。

360.-365. Hearth=home hearth を「家庭」の意に用ふることも前にも出たり。

Fled forward=passed away=elapsed 「(前の ten years が主格にて)経過した」。

Long'd to go=desired eagerly to go

nutting 前の go と合して「榛實拾ひに行く」。

Would go="I will go"

365.-370. Begged for Father—begged their mother on behalf of Father Philip.

Him like the working bee in blossom-dust,

Blanched with his mill, they found

=They found him blanched with the flour of the mill just like the bees working covered with flower-dust.

=「行つて見ると彼が粉磨場の粉に塗れて居た其様子は宛然、花粉にまみれて蜜を吸つて居る蜜蜂のやうだつた」。

He denied=he said, "No."

Plucked at him=pulled him=urged him 「引つ張つた=入らつしやいと催促した」。

370.-375. Yielded readily to..... 「早速.....に従つた」。

For was.....with them?=For Annie *was* with them 「ア
ニイが一緒に行くんぢやないか=一緒に行くんだもの」。

Scaling 「上りつゝ」。

Weary down 「荒涼たる砂山」。樹木なき爲め景色がつま
らぬ意。

Where the prone edge of the wood began

To feather toward the hollow 「森がナガラカに窪地の
方へと樹立が段々に見え始める邊」。此句の意味は 65-70
の註に悉し。

375.-380. All her force failed her=she was exhausted 「力
が盡きた」。

例:—My courage *failed* me at the dreadful sight. (その恐ろ
しい光景を見たので勇氣も失せた。

Well content=being well contented 「満足して」。

With jubilant (=joyful) cries 「嬉しさうな聲を揚げて」。

Broke from their elders = left Philip and Annie behind
「長上から離れた=フキリブとアニの許を去つた」。

Made a plunge=plunged 「躍り込んだ」。

Little.....flexible 「しな々々した」。

380.-385. Reluctant boughs 「イヤ々々と云ふ枝」とは樹木
の事故、口では云はれど果實をもがれることは不承知な様子
で申々手におへぬ。

Tawny clusters 「黄色の房」とは果實が熟して黄金色なる枝
をフサ々々と折り取りたる意。

385.-390. Forgot her presence 「アニの居ることを忘れた」。

Remember'd=recollected 「思ひ出した」。

One dark hour とは 75-80 の邊に説明したる如く、十
年前に處も變らぬ此邊にて、イノクとアニイとの愛情濃なる
物語を立聞したる時の苦しきなり。

A wounded life=a wounded creature 「手負の獸」。此句も
70-75 に詳解せり。

Honest forehead 「正直な額」と直譯しては可笑し。額が
正直なるに非ず、所謂 'transferred epithet' なり。

390.-395. At which=seeing the manner.

A kind of anger in him 「何だか怒つたやうに」とは口調
に角のありしを云ふ。

No more of that!=no more *think* of that! 「その事はも
う考へつこなし」。

Why should you kill yourself? 「何とて自分の命を縮め
るや=縮めるべきでない」。

395.-400. A thing upon my mind 「心にかゝつて居ること」
upon にて重荷になつて居る意あらはる。

Tho'=though

400.-405. It will out = it must needs come out 「屹度顯はれ
る」。

例:—Murder will *out*. (人殺しは屹度露見する)、又は廣く用ひ
て(隠すより露はるゝはなし)。

Beyond all hope=past hope=can not be hoped 「到底望め
ない」。

Against all chance 「どうしても見込がない」。

例:—The chances are *against* you. (君が成功する見込はな
い)。

That he who..... の clause は前の *he*..... を受ける。

Ten long years 「十年の長い月日」。此 long は十年だから
長いと云ひしにあらず、何年にても長いとも短いとも思はる
ものにて、人を待つ身には十年は非常に長く思はるゝな
り:—

- a { *Only five years had elapsed when another great fire broke out.*
僅々五年経つと又大火事があつた。
- b { *Five long years have elapsed since he was taken prisoner.*
捕虜になつてから五年の長の月日が経つた。

405.-410. **Should**..... 前の **That**..... と連絡して「とても.....てない」と云ふ意を表す。

例:—It is *impossible* that he *should* pass the examination (彼男が試験に及第するなんて逆も駄目だ)。

Unless—「—するに非ざれば」。—の部分云ひ淀みしところ Philip の内氣なる性質をよく表はせり、説明上、語を補足すれば、**Unless** (I can keep you free from the lazy gossip of the place) 「(お前が世間の口の端にかゝらぬやうに出来)ない以上は」。もつと露骨に云へば、**Unless** (you marry me and claim my protection without any fear of being talked about)

They say that..... 「.....だと云ふ事だ」「.....だと傳へ聞く」。

So quick=very quick of apprehension 「覺りが早い」。

What I would have you know=the thing which I wish to tell you 「お前に聞かせ度い事柄」。

410.-415. **I wish you for my wife**=I wish to have you for my wife 「お前を女房にしたい」。

I fain would prove a father to—=with pleasure I would be a father to—「喜んで—に對して父とならう」。

I do think—I believe

I am sure=surely

Mine own=my own children

Fast 「シカト」「變らぬやう」。

415.-420. **As happy as God grants to any of his creature**=as happy as anybody else 「誰人にも劣らず幸福に」。『神が其造り賜へる者(=人間)に與へ (grants to) 賜ふ幸福の度合丈けば (as.....as) 幸福に』。

Kin=kindred=relation 「親戚」。

Burthen=burden 「重荷」。

Save my care for you and yours 前の no care と連絡して:—

I have no care *except* (=save) the care for you and your children 「貴女や子供の事を心配する外に心配がない」。

420.-425. **Loved you longer than you know** 「お前の方ではそれとは知らぬ頃から此方よりは愛して居た」。

God's good angel=a good angel God sent.

God bless you.....with something happier than myself 「神が御身をば我れよりも幸福なるものを與へて御身を恵み賜はんことを祈る」。

425.-430. **Can one love twice?** 「人は二度愛することゝ出来るか」。とは神聖の love は生涯一度あつて二度なきものと云ふ貞潔の心を示す。即ち、云ひ換へれば *I can not love twice*. 「私には今更又人に愛情を捧げることは出来ない」。

What is it that you ask? 君の求むるところのものは何だ。「何もないだらうに」。

A little after Enoch=a little less than Enoch.

例:—Koyo is usually placed *after* Rohan. (紅葉は菅菫露伴よりも下位に置かれる)。

430.-435. **Scared as it were** = in a manner as if she were scared 「吃驚した様子で」餘りに男の熱心なるに心を打たれしなり。

I shall be wiser=I shall *know more* about Enoch.

I well may wait「待つても差支ない」。

435.-440. **I am bound** (in promise)

You have my promise=I pledge my word「誓言する」。

bide your year=await one year on your part「君の方でも一年を待て」。

440.-445. **Mute**=silent

Till=at last

The dead flame of the fallen day=the glow of the setting s.n「日の入の力なき光線」。

Pass from..... 光線が「...」から失せる」。

sent his voice beneath him=called loudly downward

445.-450. **Laden with their spoil**=carrying their spoils
spoil は(獲物)、此場合にては榛樹の實。

Gave his hand=shook her by the hand.

Your hour of weakness「勞れて弱つて居る時に」。

450.-455. **I am always bound to you**「私はお前に對して常に束縛されて居る=私はお前を慕ふて居るんだから)どうともお前の自由だ」。

I am bound アニイの詞の意味は、「私だつて(チャンと約束をしたからには)矢張縛られて居る、嘘は吐きませぬ」。

In one moment as it were 四行目下の *autumn into autumn flashed again* へかゝり、—「宛かも一瞬の間に秋から秋へと飛び移つた=束の間に一年を過ぎて復た秋となつた」。

While.....ways「家事何くれと立働いて居る(と思つてる)間に」。

E'vn as.....「.....してる程の間に」。

Dwelt upon his latest words「アキリブの一番終ひの詞(下

行の That he had loved..... をつくづく思ひめぐらした」。

455.-460. **Claiming her promise**=demanding of her fulfilment of her promise「契約の履行を要求しつゝ」。

Yes, if the nuts be ripe again=Yes, *it is a year*, if the nuts be ripe again = The nuts *are* ripe again, so there's no doubt that it is a year「榛實が再び熟して居れば一年になつて居る=熟して居るから無論一年になつた」。

460.-465. **So much to look to** これはアニイが延期の口實なり、當人の詞を其儘表せば—“I have so much to look to=I have many preparations to make.”

Such a change これも同上。—It is such a great change to me. とでも云ふべきところ」。

Give her a month 此 *her* はアニイの口上にて *me* なり。一次の *she knew she was bound* も—*I know I am bound* なり。

465.-470. **Take your own time**=at any time convenient to you=whenever you may think it convenient「何時でもお前の都合の好い時にしろ」。

Could have wept for.....「.....の餘り、泣けば泣くことが出来た(ほど心を動かされた)」。

Held him on「段々と延ばして置いた」。

Delayingly「荏苒と」。

His long-sufferance「長い辛抱氣」。

470.-475. **Abhorrent of a calculation crost**「目算が外れたので癪に觸つて」。

Chafe=fret「ぢれる=八ツ當りする」。

A ta personal wrong「自身直接の遺恨に對する」。

々がなにかフネリツブやアニイから酷い目に逢つたかのやうに」。

475.-480. **Held off to draw him on** (こゝ迄お出で)と云ふ態度をすること。

480.-485. **Hin' at worse** in either 「二人の孰れも、もそつと悪い性質だと暗示^{ほのめ}かす」。二人は昔から姦通して居たんだ、とか何とか云ふ意。 **in** は二人の「性質に」の意。

Prest upon her=urged her 「母を促した」。

490.-495. **Compass'd round by**.....=surround'd by..... 「...に四周を鎖されて」。

Blind wall of night=the darkness.

Brook'd not = could not bear the foreboding terror of his return 若しや、フネリツブと結婚した後に、良人イノクが歸り来はせずや、と云ふ心配を指す。

495.-500. **Struck a light** 「燈光を点けた」、 **herself** = for herself 「自分が事物を見得るやうに」。

The holy Book=the Bible

Set it wide=opened it

Put her finger on the text 聖書の上へ指を載せ、偶然其指の下になつた句を以つて占をなすなり。 Union Fourth Reader: The Bible Legend of the Wissahikon にもこれと同様の事あり。

'**Under the palm-tree**' 舊約聖書士師記 (Judges) 四章五節に "And she dwelt under the palm-tree of Deborah" とあり。アニイは此句の上に指を置きしなり。

505.-510. **Whereof the happy people strewing** = of which the people who were happy enough to accompany our Savior strewed and 聖書故事。基督エルサレムへ上る時、人々棕櫚の葉を撒きて其行を祝したる事あり、之を基督の

"Triumphal Entry" と云ふ。

"**Hosanna in the highest!**" 馬太傳二十章九節にあり、基督エルサレムへ上る時、其前後に従へる群集の叫びし歡呼の聲なり。

The Sun..... 馬拉基書四章二條参照。

此夢を見て、アニイは良人イノクは此世の人に非ず、已に天國に上りて、基督の御許に讚美の歌を歌ひつゝありと思ひしなり。何ぞ測らん、イノクは南洋の孤島に漂着し棕櫚樹の陰に炎熱を避けて戀々の情遠く故山の妻兒の上に馳せつゝありしなりき。本篇の精髓はこの邊より以てあり。

So you will wed me=if you desire to wed 「我に嫁ぐことを望まるならば」。

510.-515. **Merrily rang the bells** 此の bell は結婚式を告ぐる教會の鐘なり。 Enoch との結婚の記事を参照せよ。

Never merrily beat Annie's heart 前の句にて「鐘の音は楽しく響いた」と云へる對して、「だがアニイの心臓は楽しくは鼓動しなかつた = アニイの胸はゆめ楽しくなかつた」との意。鐘の rang に心の beat を對せる面白し。

515.-520. **A footstep**..... アニイはもしやイノクが生もて居はせずやと心安からぬ故、疑心暗鬼に襲はれて道を歩けば誰か並んで歩く如き心地するなり。

Nor ventured out alone = Nor dared she go out alone = 「一人で外出はし得なかつた」。 venture の次へ to go を補ひ見よ。

What ail'd her then, that..... 「.....するとは、それは又、何が彼女を苦めるのか = 何苦んで.....するのか」。

Dwelt lingeringly on the latch 「ラツチに手は懸けながらたゆたうてゐた」。 dwell on the latch は latch に手が長く懸かつて居る意。

520.—525. Were common to.....「.....には珍らしからぬ」。

Being with child 「妊娠中なので」、此用法にては child に冠詞なし。

比較:—

| She is with child. あの女は妊娠中だ。

| She has a child. あの女は子供がある。

Was as herself renewed = resembled her as much as if she herself was born again 「アニイ自身が生れ更はつて来たやうにアニイに似て居た」。

The new mother came about her heart = the motherly feeling sprang anew in her heart 「母たる情愛が復た新に心中に湧いて来た」。

例:—The beggar will come out when one is in need. (食乏すると乞食根性が出る)。

Come about = happen = spring up.

525.—530. Philip was her all-in-all = Philip was everything to her 「フネリブはアニイにとつて此の上なき大事の人となつた」。

That mysterious instinct 「彼の不可思議なる直覺」即ち、イノツクは確かに生きて居ると云ふ暗示。

The Biscay = the Bay of Biscay 西班牙の北部、大西洋に面するところ、此の邊の海は極めて暴れやすし。

roughly ridging eastward 港を出ると「東の方の海上は波の脊高く上つて」 ridge は「山の脊」などの如き「脊」の意、茲では海上荒れて、波山の如く聳え立つ様を表はす。

530.—535. Yet unvext 「しかしそれにも屈せず」。

The summer of the world 「世界の夏=熱帯」。

Tumble 船が波に「揉み動かされる」意。

The Cape = The Cape of Good Hope = 「喜望峰」。

535.—540. The breath of heaven = the wind 此處にては貿易風を指す。

The golden isles 印度半島附近の島嶼。昔は馬來半島を the Golden Chersonese と云へり。

Her oriental haven 印度の港。

Traded for himself 「自分勘定で貿易をした」。

Quaint monsters 「奇妙な化物」とは東洋の器物、例へば、佛像などには随分怪物然たる品多き故かく云へり。

540.—545. A fair sea-circle 「穏かな海の面」。

her full busted figure head 「半身を十分に彫り現はした船首の飾人物」。

feathering = rising in thin, light wavelets 「輕波を起しつゝ」。

a long course of them = a long course of the baffling winds.

545.—550. Baffling baffling wind とは「いろゝゝ變る風」を云ふ。

Moonless heavens 「月のない天」=「闇の空」。

Till hard upon..... = till at last scarcely the cry of “breakers” came, when the crashing sound was heard which meant the ruin of the ship and the loss of all.

「やがて誰かゝ “breakers!” (磯浪) と叫ぶと思ふ程なくメリメリと云ふ音がして船は壊れ人は死んだ」。

"breakers!" と叫びしは「ソーラ岩だ」と叫ぶに等し。

550.—555. But Enoch.....=except Enoch.....

Tackle 船の綱具。

555.—560. Nor save for pity was it hard to take = and but for pity it was not difficult to take = and if one had no feeling of pity, it was easy to take = 「憐憫の情さへなかつたなら.....を取ることば六ヶしくない」。

The helpless life = the poor creatures = 「可憐の鳥獸」。此 life は living things の意。helpless 「自ら支へる力なき」。

So wild that it was tame 「非常に天真爛漫なる故、人に親む」とは、凡そ、動物が人に馴れないと云ふことは、人類を恐れる故にして、傳へ聞くエデンの花園に於ける如く人畜互に害する事なく生活すれば野生の獸と馴れた獸との區別ある筈なし。即ち、「此島の原始時代的天然の間に逍遙する鳥獸は自然の儘 (wild) なるより人を恐るゝ事を知らずして人に馴れ親む」との意なり。

560.—565. Half hut, half native cavern 「半ば小屋、半ばは天然の洞穴」。

Set in this.....=being placed in..... 「.....は置かれて」。

Dwelt.....ill-content 「不満足な月日を送つた」。前行の plenteousness に應じて「物産の潤澤」なるにも拘はらず不満足に感じて。

565.—570. Lingering out..... 「.....の間 プラアラと病つて居る」 lingering disease (プラアラ病; 長びく病)。out は長く月日が延びる意味。

Death-in-life 「生きて居ながらの死」。生きて居るとは云ふものゝ死んだも同然の状態。

Careless of himself = careless of his health 「自分の健康を顧みず」。

Fire-hollowing 「火が焼いて空洞にする」。

570.—575. Fell sunstricken 「日射病で倒れた」。

That other = Enoch.

Inhe read God's warning 'wait' 「.....を見て彼は神の警告が(時期を待て)と云ふのだと覺つた」。

Wooded 「樹木茂れる」。

Winding glades 「蜿蜒たる樹下路」。山腹をうねりて登る羊躰たる小徑。

Drooping crown of plumes 「しな垂るる羽の冠」とはコーの枝が垂れ下りたる様子の羽の冠の如きを云ふ。

Convolvulus 朝顔に似て大なる花の蔓草、地中海の東部に多し。convolve は entwine にして、此草の名はクルクルからみ着く特質より來れり。

The broad belt of the world 熱帯とか寒帯とかの「地帯」を「belt」と云ふ、即ち、茲にては「熱帯の」意。

580.—585. What he fain had seen = what he would like to have seen 「見たかつた」。

The league-long roller 「數哩に渉る程に長き波の敵」。roller は横に長く轉がる波。

585.—590. In the zenith 「中天に」。zenith は(天の中心)にして、各人の頭の眞上の空を云ふ。

Sweep of..... 「.....の流れ(る音)」。

Ranged = roved at large 「アラついた」。

590.—595. The sunrise broken into scarlet shafts 「日の出が赤い條線に分たれる」とは、朝日の光が樹や何かの隙間を漏れて射し込むので紅い縞を成す有様を示す。此邊り絶海の孤島に於ける熱帯の状況を寫すこと巧妙と極めたり。

The blaze..... の句が三度迄繰り返されあるは變化なき孤島の生活が「單調にしてたゞ太陽のいつも赫々たるのみ」との意を示す。

600.—605. Globed themselves = gathered round into a circle 「集つて一團となれる」。

Hollower-bellowing ocean 「(晝間よりも)一層ゴ—ゴ—と空洞のやうな響のする海」。

A phantom made of many phantoms 「多くの幻影から成る幻影」。自分の心の中の煩悶が幻となつて種々な幻影が見える意。

Haunting him 「彼の眼先にちらつく」。

He himself moved haunting..... 「自分の方でも.....をうろついた」。haunt は人の靈魂、妖怪など彷徨するを云ふ。

605.—610. A darker isle 「もつと暗い島」。英吉利は霧深くして天闊し。此の熱帯の陽氣なる島と較べては陰氣なる故 darker と云へり。

Beyond the line 「赤道を超えてあなた」。the line = the equator = 赤道。

The peacock-yewtree 「孔雀の形に剪り込みたる水松の樹」。註の 6 頁参照。

610.—615. The ringing of his ears 「上氣して耳がモンモンと鳴る際に」。

Wherefor = why

The beauteous hateful isle 「美しきしかも厭ふべき島」。風光美なれども、無人の境にして住みづらき意。beauteous は beautiful に同じ、多くは詩に用ふ。

Had not his poor heart spoken..... = if his poor heart had not spoken.....

With That = with Goa

620.—625. Lets none,....., seem (to be) all alone 「誰れ人をも、.....さへすれば、孤獨の感を起さしめぬ」。

625.—630. Early-silvering 「年に似合はぬ白髮の生へた」。

His own = his wife and children.

His lonely doom came to an end 「彼の淋しい運命も終局を告げた」 = 「淋しい身の上を脱し得べき時が来た」。came to an end = ended 「終つた」。

Blown by.....from her destined course 「定まれる航路から吹き外らされて」。

630.—635. Stay'd by this isle = stopped at this isle 「此島に寄港した」。

Across a break 「破目を通して」。「霧の晴れ目を通して」。

A crew = a party of crew.

635.—640. Burst away = scattered about.

Looking hardly human 「殆むど人間とは見えない」。

640.—645. inarticulate rage 餘り焦れつたので舌も廻らず「ハッキリ口がきけないのでザレツたくて、心がイライラする」。

645.—650. Long-bounden tongue 「長く縛られた舌」。長い間喋舌らなかつた舌。

Whom 前の he = Enoch を受く。

Scarce-credited = which was scarce credited 「なかなか信用されなかつた」。

650.—655. Gave free passage home 「故郷迄の更船を無賃にしてやつた」。

Shook His isolation from him 「孤獨寂寥の感を振り落す = 孤獨の感を忘れる」。

Aught of what he cared to know = anything of what he wished to know 「自分の聞きたかつた事は何一ツ」。

655.-660. His fancy before the lazy wind 「彼の想像はのろのろした風より先きに馳せて」。

660.-665. Morning breath 「朝風」。

Ghostly wall 白い土の岸壁が霧に包まれた形容。

Levied a kindly tax upon themselves 「自分達自ら親切氣で税を集めた」。「親切にも各自離金をして」。

665.-670. Even=Just

670.-675. Either haven 102 を参考せよ。港が二ツに分れ居る、其兩港がそれぞれ、大洋に通ずる港口の chasm より霧が吹き込み来る意。

Drawn thro' either chasm, (一行飛んで)。

Rolled a sea-haze 「兩方の斷崖の割れ間を通つて巻き込み来る海の霧」。

Whelmed=enveloped on all sides 「四方を包んだ」。

Cut off the length of highway on before 「前方の大道の長さを切り詰めた=大道が前方少ししか見えない」。

Left but narrow breadth to left and right Of..... 「左右には..... のホンの狭き幅を餘せるのみ—左右の野や島も霧の爲によく見えず、見ゆるは近き一帶の狭き一部分のみ」。

Thro' the dripping haze the dead weight of the dead leaf bore it down 「滴る霧の中を朽ちたる木の葉の重たげに白から落つる」此一句如何にも巧に晩秋の景色を表はし得たり。

680.-685. Last=at last

As it seemed 「さながらに」。

A great mist-blotted light 「大きな霧に曇つた光り」と

は、町家の燈光が霧の間に透きて見ゆる形容。

Flared on him 「パツと彼の面を照す」。

Foreshadowing..... 「.....を蟲が知らせて」。

685.-690. Dead or dead to me = was she dead or was she dead to me? 「アニイは死せりや、又は我れには死せしなるか」。dead to me とは他の妻となれば假令生きて在るともイノクにとりては死せると同様。

690.-695. The pool 入江の「浪靜かなる水面」を意味す。

695.-700. Of old 「舊時」。

Front 家の「表構へ」。

of timber-crost antiquity 「板を打つ違へにしたる昔風」。

Propt 「支柱をしたる」。

Daily-dwindling profits 「日に々々衰へ行く利益」。

A haunt 「始終行く場所」。

Brawling seamen 「やんちやん騒ぎをする船員共」。

With yet a bed for wandering men 「まだ流離ふ人人を泊らせる寢臺が一臺ある」。

700.-705. Garrulous 「饒舌の」「多辯の」。

Nor let him be=did not leave him alone.

Breaking in 「入り込んで=罷り出て」。物を考へて居る最中などに入つて来て單調を破る意。

Annals=history=incidents

705.-710. Well had deem'd=would have thought

wooing 男子が自己の結婚したと思ふ女に向つて色々信實を盡し、女の心に取り入るを云ふ。

Yearn'd to see=longed to see 「やる瀬なく逢ひ度い」。

715.-720. If I might..... 「.....が出来たら」如何ばかり満足ならんとの意。I should desire nothing more, if.....とでも補足して見よ。

Drove him forth (一行隔てて下の末) to the hill 此主格は前の the thought ならば「逢ひたい見たいと思ふ念が彼を驅つ、山へやつた=逢ひたさに堪へ兼ねて山へ出かけた」。

725.-730. **The ruddy square**..... 「.....の赤々とした四角な輝き」、家の窓から射す燈光。

The beacon blaze 海上の淺瀬などを警告する爲めの燈臺。

The bird of passage 嚴格に云へば「候鳥」なり。併し、廣く解すれば「海を渡り行く鳥」。

730.-735. **Beats out his weary life** 「beacon へ突き當りて生命を隕す」、或る燈臺にては硝子へ突き當りて死する鳥幾十萬羽に及ぶと云ふ。

The latest house to landward 「陸地の方へ進めばこれを最後の家」。即ち、一番山寄りの家。

The waste 廣漠たる「空地」。

A walk of shingle 小石を敷いた「歩道」。

Thence=from there

735.-740. **That which he better might have shunned, if griefs like his have worse or better, Enoch saw**=Enoch saw that which he might have done well to shun, if such deep grief as his can get worse or better = Enoch saw the scene which he ought not to have seen, though Enoch's grief was already so excessive as could not grow worse = 「イノクは避け(て見なかつ)たらよいものを見た、若しイノク程の哀しみが軽くなつたり (better) 重くなつたり (worse) するものとすれば」 = 「イノクのは見まじきものを見た、尤もイノクの哀しみはもう極點迄行つて居るんだから此上(どんなものを見なつて)哀しみを増すなど云ふ事はなからうけれど」。

740.-745. **Silver**=silver utensils 「銀の食器」。

Burnished board 「磨き込んだ食卓」 board=table

A later but a loftier Annie Lee 「アニーリーの後から生れたが併し、丈は高く」。「アニーを若くしてもつと丈を

高くしたやうな姿」。

750.-755. **Dangled**..... 「.....がアヲ下つた」。

Creasy 「くびれ目多き(肥つた)」。

Caught at (.....) **it** 「その指環を取らうとした」。**at** が未遂の行動を示す事多し、

例:-

The boy *reached at* the branch. (其子供は枝に届かうとしたが出来なかつた)。

Ever=always

with him Her son 此 him と son は同一人。

755.-760. **The dead man** イノクは一時死んだものと同様の境遇に陥りたればかく云ふなり。

Beheld His wife his wife no more = found that his wife was no more his wife 「甦つて見れば我妻は已に我妻ならず」。

760.-765. **The babe Hers, yet not his**=the babe which is her babe but not his babe 「アニーの赤ん坊ではあるがイノクのではない」。

That other=the other father=Philip

Lord of his rights and of his children's love 「父たり夫たるイノクの権利を我ものとし、且つ又、子供の愛情を身に受けて居る」。

Things seen are mightier than things heard 「見たものは聞いたことよりも人を動かす人が強い」。

Send abroad=utter

Which in one moment (.....) **would shatter**.....= which, if uttered, would shatter.....in one moment 「若しその叫聲が発せられたら忽ちにして.....を滅茶苦茶にしてしまふ」。

The blast of doom 「最後の審判の喇叭の響」。基督教にては神の審判の日 (Doomsday) と云へるありて、其日に天の喇叭鳴、渡れば基督榮光の雲に乗りて下界に降り來て、總ての人を判くと云ふ信仰あり。

770.-775. Grate underfoot 「脚下にきしる = 踏まれて音を立てる」。

775.-780. He would have kne't, but that..... = he intended to kneel, but could not do so on account of the feebleness of his knees 「膝まづかうと思つたが、膝が利かない爲めに膝まづけなかつた」。*would have.....* の構文に「.....の志はあつたが出来なかつた」意を含む。

Falling prone = falling on his stomach

780.-785. Take me thence = take me away from that isle
Blessed Saviour = Jesus Christ

785.-790. Father = 「天父」 = 「神」。

Break in upon her peace 「アニーの平初を攪亂する」。

break in upon..... = intrude upon..... 「.....を侵す」。

例:—

A ruffian *broke in upon* the wedding ceremony. (暴漢が結婚式の席上へ暴れ込んだ)。

Betray myself = reveal myself = 「(自分の心ではさうする氣もないのに) 自分を露はす = 自分だととられる」。

790.-795. No father's kiss for me 「子供達を我は父として接吻は出来ない」。

795.-800. Was not all unhappy 「萬更不幸と云ふばかりではなかつた」。「幾分慰むる處あり」。

Evermore Prayer 「永久不斷の祈」。

800.-805. A living source within the will 「精神の中に潜

るゝ居る生ける源泉」宗教的に云へば基督の興へ給ふ活ける泉、即ち、聖靈、

Beating up thro'..... 「.....の間を辛ふじで切り抜けつゝ」。
beat up は航海上用ふれば「風に逆ひて之字形に進航する」事。並にても其意にして世の中を海に譬へしなり。

Kept him a living soul 主格は二行上の *Prayer* にして、「其祈がイノツクに生ける靈を失はず保たしめた」。

805.-810. Poor soul! = poor creature 「可哀相に」。

Fear enow (= enough) 「それや随分心配だ」。

810.-815. I wait His time = I will wait the time of my death as God wills 「神の御意のまゝに死時を待つ」。

Set himself (下の行の) **to work** 「仕事にかかつた」。

Scorning an alms 「人の合力などは鼻の先であしらつて= やせても枯れてもイノクは男一匹だ、他のお情は受けないと云ふ氣概で」。

To all things could he turn his hand 「何事へでも手を出す」。

That brought the stinted commerce of those days 「其當時の多くもない貿易品を積んで來た船。 *stinted* = limited.

815.-820. He did but labour for himself 「彼は單に自分の爲めにのみ働いた」。吾々の働くのは皆自分の爲めの如きも實は然らず、親を喜ばせるとか妻子に樂をさせるとか、何か他の者の爲めに勞役するなり、故に、妻も子も親も兄弟もなき者は働くにも張合なくつまらなく感ず。

820.-825. There was not life in it. Whereby the man could live 「その働には生命がない、働の中に生命があればこそ人は生存するものだに」。仕事に生命があるないとは自分の好きな事業とか、大に儲かる事とか云へば活氣滿々

たるも、いや氣のさした仕事では壽命が縮まる。

Roll'd itself round..... 「月日はめぐつてイノックが歸つてから一年となつた」。

Gentle sickness 急性ならぬ、所謂「アアラ病」。

825.—830. No gladlier does the stranded wreck see (二行隔てゝ) than he saw Death—

「難船して陸へ打ち上げられた船人が.....を見るのもイノックが死を見ると較べれば嬉しげでない」

= 「難船した人が救助船を見る時の嬉しさよりも勝つた嬉しい思でイノックは死の來るを迎へた」。

830.—835. For thro' that dawning gleam'd a kindlier hope On Enoch thinking..... 「その故は、死期が近い事がイノックには楽しい望の光を與へた、それはイノックが.....と考へたからだ」即ち、望の光とは“.....”と云ふ考なり。

835.—840. Upon the book=upon the Bible.

Bring you round 「本復させる」。

845.—850. I knew him far away=I could recognize him a long distance off 「遠方から見分けられた」。遠方からでも、アレはイノックだと分る程によく知つて居たとの意。

I mind him=I remember him

Cared for no man 「誰人をも憚らず」。

850.—855. No man cares for him 「誰人も彼を構つて呉れない」。とも取れるが、技では矢張り「重んじない；憚らない」意で上と對照させたもの。

855.—860. What I am=my present condition

860.—865. That name has twice changed 「アエイの名は二度も變つた」。初めは Arden 家に嫁した時、姓變り、再び Ray 氏に嫁し又、姓を變へたる故かく云ふ。

865.—870. Her easy tears 「すぐにこぼれる涙」。此女の涙もろくしてスグ泣く性分を表す。

Proclaiming..... 「(イノックが歸つた)と觸れ歩く」。

Awed and promise bounden she forbore 「イノックの様子に威壓され又、約束の詞に縛られて、我慢した」。

870.—875. Your bairns=your children

Hung a moment on her words 「イノックも一寸の間ミリアムの詞に任せて何とも返事をしなかつた」。

875.—880. Mark me and understand 「我言葉を心に止めて了解せよ」。

880.—885. Save for the bar between us 「吾々二人の中垣なかりせば」。

My latest breath was spent in blessing..... 「此れを最後の呼吸が.....を祝福する事で費された=今呼吸を引き取ると云ふ時迄も.....の身の上に幸多かれと祈つた」。

885.—890. Hardly knew me living 「生存して居る我れを殆ど見てない」=「(實父たる)私を碌々知らずにゐた」。

890.—895. There is but one of all my blood..... 「私の一家血脈の中で私を見知つて居るものは唯一人あります」。これは眞に死したる赤兒なり。

895.—900. In bliss 「天國の榮に入れる」。

900.—905. Ceased=paused

A voluble answer 「重れ返事」。

905.—910. at intervals 「時たま」折々」。

910.—915. Past.....soul away=.....soul (=man) passed away.

916. Had seldom seen a costlier funeral 「其村がそんな立派な葬式を滅多に見なかつた=其村でそんな立派な葬の出たことはなかつた」。

卷 末 に

此一篇を讀了して吾々の感ずる所は篇中の人物がどれも人情に篤く、義理を辨まへ、男女の操正しきことである。最後の “And when they buried him the little port had seldom seen a costlier funeral.” とある中の *they* は Philip and Annie で二人が Enoch に對して死後の禮をも厚くしたことを想はせる。Enoch の忍苦敬虔の生涯が吾々の同情尊敬に値すると同時に、Philip の自制溫柔なる性格も亦、乾燥せる吾々の胸裡に脈々たる愛の眞清水を湧かしむる思がある。

尙、Enoch 臨終の叙事中 “a calling of the sea” とあるは、譯者の生國越後にて俚俗「海鳴り」といふものに似て一際發作的に起る「海の號び」と想はれる。これは Cornwall 地方の沿海に起る現象で往々五六哩の内地にまで響き渡るとのこと、海波と氣象との關係より生ずるものらしい。

大正十四年五月十八日印刷
大正十四年五月二十日發行

イノツクアーデン奥附

正價金壹圓五十錢

著者 長谷川 康

發行者 東京市神田區三崎町三丁目二十六番地
笹川 欽

印刷者 東京市小石川區久堅町五十九番地
板倉 賢松

不許
複製

發行所

東京市神田區三崎町三ノ一
日進英學校內
振替口座東京四八九一七番

笹川書店



終